

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# DePOLA

でぽら

21

2001年

秋冬号

特

集

## 21世紀の新風を地方から カントリー・ニューウェーブ!





## 21世紀の新風を地方から

# COUNTRY NEW WAVE!

特集企画に寄せて

**美** しい海と温かくおらかな人々が暮らす南の島、深い山と渓谷、斜面などを活かして独自の風土を育みながらお年寄りが現役で頑張っている村、ダイナミックな自然と豊かな生産大地に夢を託す北国の人々。

日本には世界のどこにもない豊かな地形風土と四季折々の自然、そこで育んできた伝統文化や物産、人々の知恵が息づいています。これほど美しい変化に富んだ自然環境と、多様で豊かな物産や文化を持っている国は他にほかにないでしょう。

それは、自らの地域の存続に命を賭けて守ってきた人々、大地で生きることを誇りにしてきた人々、人間の未来に夢を持つ人々がいるからこそです。

**1** 世紀、それは20世紀に築きあげてきた英知と実績を継承・発展させ、平和で安定した社会を維持しながら、さらに豊かに幸せに、生きがいと共有できる社会を築いていくことではないでしょうか。

人類は、20世紀に効率的で近代的な経済社会を構築し、グローバルな国際社会を実現してきましたが、一方で、地球の大切な自然環境や地域特有の歴史風土、皆が互助協力していくという共同社会等を破壊してきたことも事実です。経済社会の発展は、地方から都市へとという都市集中型社会を招き、その結果、地方は伝統的な農林漁業の不振や過疎化、高齢化が深刻になっています。

21世紀はこのような失ってきた大切なものを再生復権し、再び豊かで活気に満ちた地方の暮らしを取り戻す、それを次世代に伝えていくという、大変重要な大切な時代なのです。

**こ** のような背景を受けて、都市の方にも目を向けがちだった地方の人たちが、

まず自分たちの暮らしや自然環境を見直し、その素晴らしさを再発見する、地方で暮らすことを楽しむという傾向が、確実に根を張ってきました。趣向を凝らしたアイデアやパワーで、町や村が元気に活発に動き出しています。従来の開発優先型から、あるがままの自然を保持・再生して、かけがえのない遺産・資源として次世代に伝えていくことを町村のリーダーたちも真剣に考え始めています。

都会に住んでいても、日常とは異なる暮らしや豊かな自然を求めて田舎に行く人たちがたくさんいます。

都会に住んでいて何となく違和感を覚える、例えば、経済不況や仕事で悩んでいる人、将来に夢やビジョンの持てない若者、子育てに自信のないお母さん、ゆったり充実したセカンドライフを望んでいる中高年の皆さん、今こそ田舎へおいでください。田舎は、一緒に「地方の明日づくり」を考え、参加してくれる仲間を待っています。

**南** の島、北の大地、山深い村など各地から爽やかな風と熱いメッセージをお送りします。ちょっと湿っぽい風が吹き、物悲しい草笛も聞こえるでしょうが、それもふるさとの現実の姿です。つらい厳しい現実です。それらを含めて、タイトルは格好よく「カントリー・ニューウェーブ」としました。

「てぼら」編集部  
(財) 過疎地域問題調査会



北海道美瑛町「セブンスターの丘」で

## 「でぼら」とは

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。わが国の過疎市町村の数は1273(過疎地域市町村1171と過疎地域市町村に準ずる特定市町村102の合計)、全市町村の39%にも達しています。過疎市町村は豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。多くの人たちが過疎地域を理解し、交流をすすめるために、過疎地域と都市地域を結ぶホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として、「DePOLA でぼら」をお届けします。回覧し、多くの方にご高覧いただければ幸いです。

写真・表1 / 左上 / 鳩間島、海で遊ぶ子供たち 左下 / 紀和町丸山千枚田 右上 / 美瑛町ケンとメリーの丘 右下 / 和寒町カヌー教室

写真・もくじ 上から / 日吉町ダム湖、双海町・若松課長、東和町・役重さん、大鹿村・小林さん

愛媛県内子町 / 水車のまわる山里

## 21世紀の新風を地方から COUNTRY NEW WAVE! 特集企画に寄せて 2

### 大地の風と恵みをEXPRESS

多様な作物と花と樹木と  
微笑む北の大地を育む人々 北海道美瑛町 4

星を聞き、風を見、海に想う  
島のおじいと[息子]たち 沖縄県・鳩間島(竹富町) 8

逆転の発想が救った  
山とダムの町の開発プラン 京都府日吉町 12



### 輝いている人々がいる魅力的なムラ

夕日・夕焼けづくめで地域おこし  
夕日を物語にした町

愛媛県双海町 15

自然や動物、「たくさんの素敵な人たち」と  
役重真喜子さんが移住した町

岩手県東和町 18

南アルプスの山里でゆったり自適に暮らす  
校舎は交流と農業体験の場に

長野県大鹿村 21

ワーキングホリデー制度導入から5年  
自然と人が魅力的、カリコボーズ  
の休暇村 宮崎県西米良村 24



### 貴重な風土と文化財を21世紀へ

上流域の意味と価値、そこで暮らす人々の  
未来を考える 日本上流文化圏研究所・赤沢青年同志会

山梨県早川町 27

棚田に原風景と先人の偉業を見た

保存会のお年寄りの指導で250人が田植え

[丸山千枚田] 三重県紀和町 30

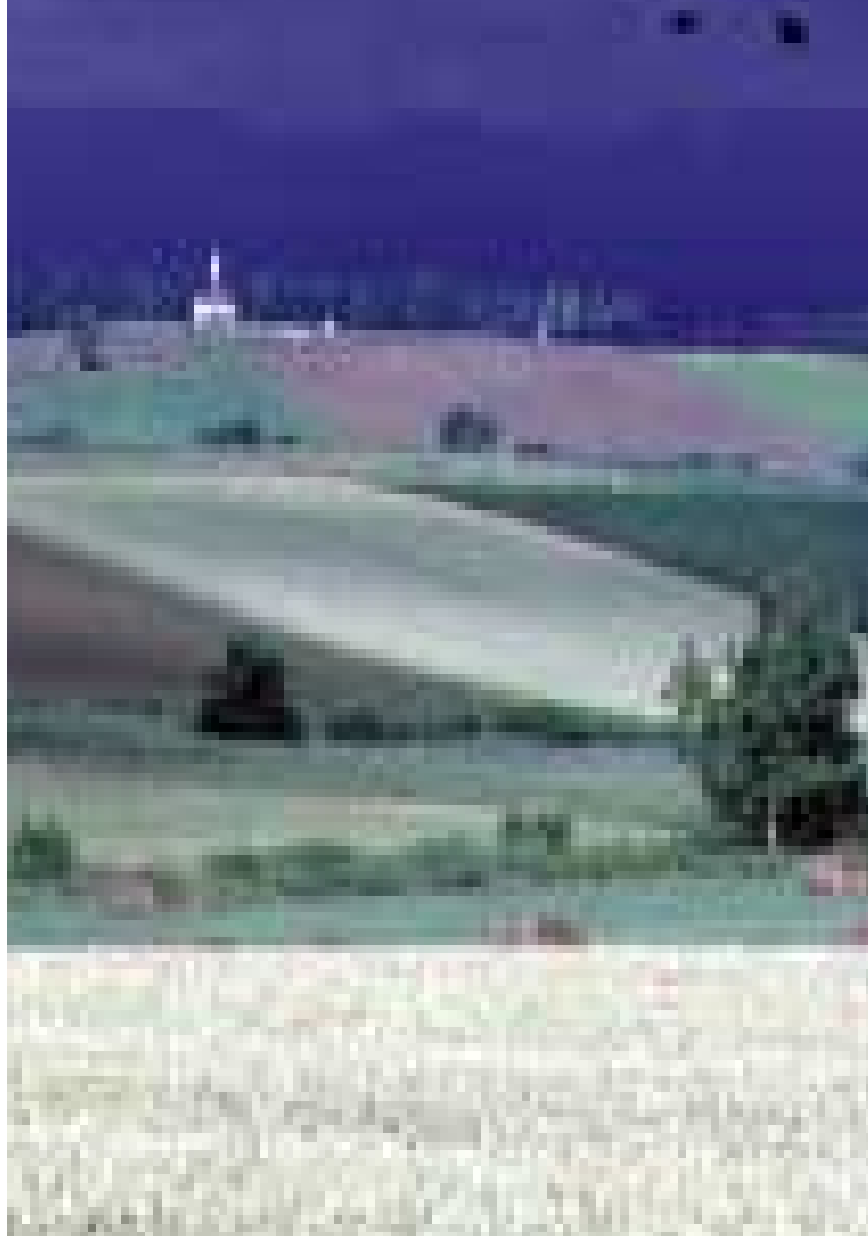
・棚田を守れ! 保存へ向けて新たな動き 33

### INFORMATION 34

- ・モトクロス、カヌー、玉入れ選手権...スポーツ交流の町 北海道和寒町
- ・農山村の原風景を残す 京都府美山町
- ・ヤマネコの楽園を守れ 西表島
- ・過疎連盟新作ビデオ完成「森の贈りもの、川の贈りもの」ガイド 全国過疎問題シンポジウム「2001inおいた」のお知らせ他 編集後記/奥付 35



# と樹木と 大地を育む人々



「ゆるやかな曲線を描きながら果てしなく続く丘、その彼方には大雪、十勝の山々がそびえている。初めてみる雄大な丘の風景に私はみとれていった」と写真家前田真三がその感動を紹介した美瑛町は、やがてデザイナーやディレクター等がコマーシャルのロケ地として使うことで一層知名度を高めた。

現在では年間140万人が訪れる北海道有数の観光地になり、「21世紀に残したい風景」のトップクラスにもなっている。

とはいっても、風景を見にくる人から入場料を取るわけではない。逆に農家の人たちは、作物を工夫し、花の咲く時期や色の組合せ（パッチワークの丘づくり）に一段と心配りをし、町も景観条例の先進地として取り組んでいる。

人気のスポット、その陰で農業、景観づくり、観光等に工夫、努力している人々たち取材した。

## 美しい大地に「夢」を託して フォトギャラリー 拓真館

美瑛の丘がここまで知名度を高め、観光地として屈指の町になったのは、前田真三（写真家）の存在があったからこそ。拓真館は前田真三個人のフォトギャラリーだが、規模は公営美術館並み、本人の要望で入場料無料で現在に至っている。まず美瑛へ来た人が必ず

訪れる場所で、年間40万人が入場している。1万坪の敷地には、白樺回廊やラベンダー畑、四季折々の花畑等がよく手入れされており、前田真三のこの地区への深い愛情と「夢のある風景」を未来へ繋げたいという思いが伝わってくる。

ここは旧千代田小学校の跡地で、真三がこの丘を初めて訪ねた昭和46年に廃校になった。以来放置され、校舎は屋根もめくれて雨が漏り、校庭は荒れ放題。手をつけることは戸惑いもあったが、地域の拠点として残したいと撮影にくるかたわら庭づくりや周辺の環境づくりを手がけた。町の協力もあり、昭

## 大地の風と恵みをEXPRESS



拓真館入口とギャラリー内部（左）  
前田真三 / 1922年八王子市生まれ。学生時代に戦地へ行き、復員後はニチメンに入り趣味でカメラをはじめ。74年美瑛等の出会いを刊行した「ふるさとの四季」で各賞受賞、以来風景写真分野に新風をおこし、世界的写真家として著名に。98年心不全で急死。写真集多数。○拓真館の展示写真



# 多様な作物と花 微笑む北の

びえいちょう  
北海道美瑛町



大久保さんの農場「大誠ファーム」とケンとメリーの木（ポプラ）

和62年にギヤラリーとしてオープンした。

館内では美瑛付近の丘を題材にした写真を展示、写真や本、ポストカード等が購入できる。ギヤラリーの窓から見る緑や拓真館へ至る丘の風景の美しさも、同館ならではの魅力のひとつだ。

それにしても何と美しく感動的な写真であることか。夕日が沈む前の台地の一瞬の燃えるような輝き、働く農家の人々の

祈りにも似た牧歌的な写真、厳しい冬の素顔の美瑛等々。

今野榮喜館長は「沢山撮ってその中から選ぶという人ではなく、その台地にはどんな作物が作られ、何時発芽し開花するか、各丘の日の出から日の入り時間、唐松林や木々の状況等すべてよく知っていて撮影していた。農家の人も先生に聞くほどでしたよ。美瑛の自然の美しさと共に、泉さんという農家と知り合い、家族同様に20年来交流してきたことが作品や拓真館に生きていると思います」と語る。今野氏の兄・今野三樹夫氏が役場の企画課長をしていた時に真三と知り合ってギヤラリーづくりに協力、それが縁でいまは榮喜氏が館長に。「先生も兄も亡くなってしまいました。が、館は先生のご長男氏が引継ぎ、月の半分をここで暮らして父親と同じように各地を歩いています。小さい頃からいつも父と一緒にでしたから植物や動物が好きで大変詳しい。今は若い感性を生かして自由に楽しみながらいろいろ挑戦してほしいと願っています」

2階では晃氏の作品展「四季景」を開催していた。

## ポプラ、スカイライン：思い出を今に 「ケンとメリーの木」大誠ファーム

日産スカイラインが外国人モデルを使ってこの丘で撮影したのは昭和47年のこと。じゃがいも畑に立つひととき大きなポプラの木とともに大久保誠さん（48）の農地が脚光を浴びるようになった。大久保家は18haを耕作する農家で、早くに父親が亡くなったため誠さんが農業を担ってきたが、今はペンションや売店を営んでいるため7haを耕作し、あとは人に貸している。3種類のジャガイモ、トウモロコシ、麦、それに花卉を有機栽培し、訪れた観光客やお得意さんに宅急便等で送っている。



大久保さんと美千代さん。奥さんは鹿児島県指宿の出身で、美瑛に観光で来て大久保さんと知り合い5年前に結婚した。大誠君（2歳）を育てながら売店をきりもりしている。「夏は北海道は涼しいと両親が来て忙しい時は手伝いもしてくれ、冬は私たちが指宿へ温泉休暇に行きます。」

「メインはジャガイモが白やピンクの花をつける7月ですが、来てくれる人のために春から秋まで花が楽しめるようにと、冬の間に苗をポットで作り、次々と咲くよう工夫しているんです」と大久保さん。段差のある高台であったため、白金ダム畑総合整備事業で水道管を設置、それに伴い機械化しやすいようにと自費でなだらかな丘へと圃場整備した。

「昭和59年より23戸の農家で堆肥の生産組合を作って有機物の土地づくりを進め、連作障害のない作付けを計画的に行っています」と語る大久保さんはペンションの主人というより逞しい農業後継者の横顔となる。

名物のポプラは、大正12年に道の博覧会に行った折りにヨーロッパの木だといって2本買ってきて植えたものの一本で、よその家のもう一本は風雪で倒れてしまった。「いまは樹医さんにも診てもらってしっかり手入れしています」

スカイラインについても感動的な話を聞いた。「いきなり外国人モデルが来て撮影が始まった時はびっくりしましたね。あとで車の宣伝用のものだとは知ったんですが、新車が出

拓真館・今野館長



山中さんが作成したケンとメリーに関する企画書、絵コンテなどの資料(上)  
自宅庭に展示する当時の日産スカイライン(下)



るたびにここで撮影するようになりました。実は昨年、札幌に住むという一人の老人が訪ねてくれて、そのときのコマージュの企画書や台本、コンテを預けたいと置いていったんです。山中弘光さんというフリーのデザイナーで、彼は39歳という若さで病気で亡くなってしまった。訪ねてくれたのは彼のお父さんで、自分で持っているよりここにおいて保管し、人にも見せてあげてくれれば嬉しいと言っていました。

ケンとメリーという男女のラブストーリーをカッコいい車と美瑛の自然の中で演出するというもので、ストーリーと絵コンテ等が丁寧に鉛筆で書いてある。北海道を知り尽くしていたデザイナーだったからこそ生まれた傑作だったと納得できる。大久保さんはこの貴重な資料を大切に保管、一部を公開して中山さん親子の志に報いたいと考えている。メーカーからの謝礼は何ひとつなかったが、記念にしたいと当時のスカイラインを探し求めた。小樽市で購入したものが庭に置かれていて、観光客に人気をよんでいる。

### 上川の農産物は品質最高! 「セブンスターの丘」大庭ファーム

道路脇に一本の大きなカシワの木がある。

この樹を通してみる丘陵地が人気があり、次々と観光客がきて写真を撮っていく。その近くに大庭亮一さん(59)の簡易休憩所があり、採れたてのトマト(間もなくトウモロコシも登場)、水で冷やしたサイダーなどを売っている。少し照れながら、来てくれた人にサービスしているという素人っぽい雰囲気の中で、観光客の多い時期は奥さんと交代で店番をする。15haの農地では麦、ジャガイモ、小豆、トウモロコシ等をつくっていて、「上川のもものは品質のよさでは北海道一だね。小豆は大納言と言われる和菓子用のものは上川が最高で、メロンも美味しいよ。家の規模は小さいが、30、40haを耕作する専業農家がこの行政区には29戸ある。皆熱心ないいものを作っているけれど、農産物も安く叩かれて、経営的には大変だね」と大庭さんは地区の自慢と農家の状況を目を輝かせて語る。その一方で「ウチは農業後継者がいないんですよ」と心配顔。

大庭家には3人の子供がいて、長男は消防署に勤務。公務員や会社員と違って、いつも待機中という仕事なので、家の農業は全く手伝ってくれず、今後も期待できそうにない。売店の仕事もあるので、これからは無理せず、やれる範囲で農業を続けていきたいという大庭さん夫婦の気持ち。「後継者がいない」という言葉に置き換えているのだらう。

ところでここは煙草のセブンスターに登場して一躍人気のスポットになったのだが、「人に聞くまで知らなかったね。ラベルにも写真が載ったらしいが、地域限定煙草だったから手に入らない。JTMデザイン会社も挨拶ひとつないんだから」

カシワの木は前記のポプラと同様に、隣地との境用に植えたもので、昨年開拓周年式典を地区でしたことから見ると丁度100歳



になる。どこにも生えてる樹だが、大きくなると農地が陰るので切ってしまう場合が多いそう。マイナス20度になる冬にも耐えてきたカシワを大庭さんは暖かく見守ってきた。もうひとつ大庭さんの自慢は、その先の道路脇を美しく彩る白樺林。自然に生えてきたものを手入れし間引きなどするうちに街路樹となった。農作物も毎年耕作地を変更、空いたスペースには花を植えるなど、観光地としての気配りにも力を入れている。

### 30種の花が楽しめる 「四季彩の丘」ファーム

国道237号とJR美瑛駅周辺の町中心街の北部丘陵地がケンとメリー、セブンスターの木などがある、いわゆる「パッチワークの丘」といわれる地区で、南部の美馬牛地区には拓真館や美馬牛小学校の塔があり、美瑛のもうひとつのダイナミックな景観がある。眼

観光客で賑わう「セブンスターの丘」カシワの木の下でみな記念撮影する(上)  
自生していた白樺を育て上げて美しい街路樹にした大庭さん(下)

『四季彩の丘』のひまわり畑  
 前方には十勝岳連峰が見える  
 熊谷さん、趣味の写真作品をもって  
 (レストランで)  
 左はペンション「ウイズ・ユー」



前の十勝岳には雪渓も見え、さらに東へ車で20分も走れば白金温泉、十勝岳温泉。そんな一角に熊谷留夫さん(49)の営むお花畑「四季彩の丘」とペンション「ウイズ・ユー」がある。ひまわり畑が広がる高台で、途中には新しいペンションも幾つか建っている。

熊谷さんはJAの理事や町の景観条例審査会のメンバーもしており、地域づくりに関心に取り組んできた。新星地区を観光拠点のひとつにしたいと始めたお花畑「四季彩の丘」は東京ドームの3倍、7haの面積を持ち、黄からし、ひまわり、マリーゴールド、ラベンダー、ルピナスなど30種類の花を栽培している。ひまわり畑に迷路を作った話題になっているが、今年は春に早魓が続き、成育が思わしくないのが実現しなかった。



我々が訪ねた日は連日雨模様で「雨もしとしと降ると嬉しいんですが、豪雨だと土が流れてしまふ。見渡すかぎり美しい花を咲かすのは結構大変です」と言っカボチャやトウモロコシを使った手作りアイスクリーム、ひまわりの食用油、和からし等、無農薬で栽培した野菜や花は、旭川の食品会社と提携して商品化しており、農業に付加価値をつけたいという熊谷さんの意気込みが感じられる。

その父親の夢を手伝おうと二人の息子も農業に従事している。22、23歳と若い二人とも結婚し、長男はペンションを手伝っている。

熊谷さんの趣味は写真。花畑と眼下に広がる丘陵、厳寒の美瑛などを太陽や霧の微妙な変化の中で撮り続けてきた。ここにもアマチュアカメラマンが多数やって来るので、一部を展示し、欲しい人には実費で頒布している。

景観づくりの課題について聞いてみた。「美瑛には都会等から移住する人が1000人を越えて、民宿、ペンション、画廊等を営む場合が多い。地域との交流がないうえに、中には自然景観を無視した建物もあるので、景観条例に則して開発を規制していく必要があります。農業生産地として豊かであることが自然環境の保全にもなる。観光は付録だと自分にも言い聞かせています」と言い、休む間もなく、雨の農場へ出掛けていった。

北海道のほぼ中央に位置する美瑛町の総面

積は東京23区より広い677ha。美しい丘陵地帯のほかに十勝岳連峰西側山麓には白金温泉郷や原生林もある。景観づくりに力を入れている町らしく、道路の電柱にも配慮し、特に駅前商店街は美しく楽しい街並みが形成されていた。

美瑛町企画課 80166(92)1111

文/浅井登美子 写真/小林 恵



観光パトロールをする菅原留治さん。保険会社を定年退職してからは、地域のために役立ちたいと町内を巡回している。田畑へ入らない、広場や公共施設の美化の他、観光ガイドや農産物の紹介等のアドバイザーも。巡回しながら高齢者の家に声をかけることも忘れない。このような観光パトロールが6人いる。

美瑛駅前商店街は、美瑛産の軟石を敷き、建物と看板を統一した町並み景観が素晴らしい。パチンコ店もコンビニも粋でお洒落な町並みとマッチしている。アンティークに整備した駅舎も観光客に人気で、若い女性たちで賑わっていた。(右)







建次さんの家の前に広がる浜辺。民宿の宿泊客も、この景色を見ながら食事をとる

あるときは民宿業を営むおじい、あるときは公民館長、あるときはただの酔っぱらい、そして海をじっと見つめる漁師……。通事建次さん（54歳）は、人口50人あまりの小さな島のまさに中心的人物である。里親制度の名で知られ、海と空に囲まれた沖縄・鳩間島を訪ねた。

# 星を聞き、風を見、海に想う 島のおじいと[息子]たち

## 沖縄県 鳩間島（竹富町）

取材なんて  
バカやるめ

石垣港から貨客船かりゆしに乗って2時間。鳩間島は西表島の北、およそ7キロの洋上に浮かぶ周囲3・9キロほどの小さな島である。島への公的な交通手段としては、前述の貨客船が週に3便のみ。それ以外の方法で渡ろうとするなら、西表から郵便船に乗せてもらうか、あるいはチャーター便を出してもらうしかない。

旅行ガイドにもあまり紹介されることもない鳩間島は、観光業に対して慎重な立場をとっている。代わりにこの島の代名詞ともいわれるのが「里親制度」だ。歴史については後述するとして、現在のこの制度の窓口をつとめ、里親歴も長い通事建次さんに話を聞くのがこ



石垣を出航する貨客船かりゆし（上）  
船の到着に合わせ、島の人が出迎える（中）  
しっかりと大地に根を張るガジュマルの木（下）

の取材の目的。食料品をはじめ、さまざまな物資を積んだかりゆしが桟橋に到着、そこで初対面となった建次さんは、民宿の主人としてにこやかに言った。  
「今日も明日もいろんなお客さんが来るから忙しくてさー、まあ時間見て話そうね」  
ところが、である。その夜、島の中心部にある公民館の芝生にシートを広げ、客人たちをもてなす建次さんは、昼間とはまったく別の目つきになっていた。  
「あんまり俺はお喋りじゃないぞ。いいか、取材なんてバカやるめ。目を見てろ、俺の言いたいことはわかる」  
沖縄のことばで酔っぱらいを「ピーチャー」というが、私はそのとき正直ムツとして、「このピーチャーおじいめ」と心の中で罵った。「おじい」とは沖縄でお祖父さんといった意味。それも束の間、数秒後相手は堂々とゴザの上で大の字にのびている。  
「おねーさん、星のささやきは聞くものでね、風は見るもんだよ」  
誰かがそう言って、三線を弾き始めた。見上げれば東の空には天の川、ときおり流れ星





○上/三線を弾く阿波連先生。学校では郷土芸能の授業も受け持つ  
下/今朝採れたカツオをさばく佐藤さん(右)と建次さん  
N観光客が飛び入り参加の宴。夜はどこまでも更けることがない。右が建次さん



が目の前を横切っていく。アルコール飽和度がかなりでも、三線と唄が始まると、みんなシャキッとするのが不思議だ。隣の建次さんもムクツと起きあがる。その目が血走っていて、怖い。

「不登校とかイジメとか原因はいろいろあるさ。でも、とにかく子どもには酔っぱらった親父の姿を見せないとダメさ。今ウチには四人息子がいるよ、世界でいちばん大事な息子。」

あいつら、こうやって親父が島酒飲んで、唄って踊ってるとこ見て育つてくのさ」

### 本音と建て前と

到着第一日目からなんと衝撃的な出来事だった。ある本に「島の人々の本音と建て前」として、なるほどと納得させられることが書いてあった。鳩間島の人と自然の魅力にとりつかれた著者が、何度も通い、書かれた本『パイヌカジ』(羽根田治著、山と溪谷社)だ。島では、ほぼ同じ顔ぶれが毎晩のように酒を酌み交わす。漁のこと、明日の潮のこと、島の行事をどう段取るか、学校との話し合いをどうするか。「酒を飲むと本音が出るのに、翌日にはケロッとして建て前にもどっているんだよね。でも、それはきつと、島という閉鎖的な空間で生活するための知恵なんだろうね。」

本音と建て前、あるいは素面とピーチャー。もちろん漁に連れていったり、祭りの手順を教えたりと、建次さんは子どもたちに数え切れないほど多くのことを伝えようとしている。夏の豊年祭でも子どもたちは、建次さんから舞いや三線を学ぶ。しかし公民館長でもなく、里親制度の中心人物としてもなく、単なる一人の親父として「酔っぱらい宣言」をしたのかも知れない。

### 子乞いの歴史

鳩間島がもっとも活気にあふれていたのは、カツオ漁で湧いた戦後間もない頃。信じられないことだが、1949年には島の人口がなんと650人あまりだったという。

しかし皮肉にも沖縄が日本に復帰した前後から島の過疎化が加速し、1974年には中学校が廃校、人口も有史以来最小の21人にまで減少したという。これは行政の手が離島に

までなかなか届かなかったということにも一因があるようで、実際水道が敷かれたのは80年、電気が使えるようになったのは83年のことだという。

すでに診療所も閉鎖され、唯一残っていた小学校はいわばこの島が存続できるか否かの砦となっていた。たったひとりの小学生が2年の春に島を離れるということで、島の人々の学校存続運動が始まった。このあたりの事情については『子乞い 八重山・鳩間島生活誌』(森口諭、マルジュ社)に詳しいが、このとき里親制度を確立させたのが建次さんの父・力(ツル)さんだ。まずは石垣島にいた弟夫婦とその子どもを呼び寄せ、続いて当時は本土に

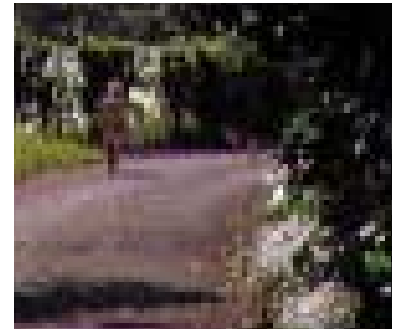


P島を縦断する道で出会った牛  
M日帰りで見学に来た石垣島の子どもたち





鳩間中学校。朝は授業の前に皆で校庭等を掃除する。登校する小学生の女の子。お姉さんと来島している。建次さんの息子たち



いた建次さん一家を島に迎えた。「里子」を迎え入れることは、学校の存続、ひいては島の存続を意味していた。現在、島には4軒の家に14名が山村留学している。

しかし現在、里子として島にやって来る子どもたちは、「それなりの事情を抱えている」という。不登校児、イジメられっ子、不良、あるいは肉親から虐待を受けた子ども。島に來たからといって万事がうまくいくわけもない。ホームシックにかかって逃げだそうとした子どももいたし、盗みを働いた者もいた。里親としての島の思惑と、里子を送り出す都会の思惑、子どもたちに会ってみて。

### 世界でいちばんの息子

建次さんの「世界でいちばん大事な息子」たちは4人。それぞれ京都、大阪、兵庫、そして沖縄は那覇市からやってきたという。みんな当然のことながら真っ黒に日焼けしている、話の間もお互いにちよっかいを出しながら笑いあっている。

「ゲーセンもないし暇だなあと思うことはあるけど、景色がいいからいいかな」と答えた先川孔明くんは中学3年生。来年の春には、「友達が大量いる地元の」高校に進学する予定だ。「最初はよく泳いでたけど、今は飽きちゃった、暑いし」という森山元達くんは中学2年生。

里親である建次さんに対しては、「先輩から怒ったら怖いぞーって脅かされてたけど、そうでもなかった」とけろっとしている。「誰か怒られた人は？」と尋ねると、みんなが上中野政志くん(中3)のことを「お前だ、お前だ」と囁した。骨折をしているときにボートで釣りに出て遅くなったところを建次さんにガツンとやられたらしい。山内達人くん(中1)も「遊んで、こはんの時間に間に合

わなくて」おばさんに何度か怒られたと照れくさそうに言う。

島に來た理由は「お兄ちゃんが来ていたから」「親に行けと言われたから」「学校に行つてなくて、一からやり直したいと思ったから」「ヒミツ」とさまざまだが、彼らは息子という気負いもなく、共同体の一員という生真面目さもなく、ごく普通に島の夏を楽しんでいる中学生に見えた。目の前に広がるこの景色が彼らにとつて重要な思い出となることは間違いないだろう。

### 教師たちも大らか

鳩間小中学校は島の東部にある。朝八時に放送当番の子どもが自分で選んだ曲が流れ、まずは清掃、それから読書の時間があって、授業が始まる。総合的な学習として「鳩間島をよく知ろう」というテーマが設けられ、生徒の希望を取り入れて、ヤシガニ、ウミガメなど生物の観察、釣りなどが行われている。話をしてくれたのは由浅剛行教頭先生(48

歳)。出身は石垣市で、鳩間島に來る前は西表にいたという。



「どこでも通用する子になってほしい」と由浅剛行教頭先生



P建設中の町営住宅2軒。応募資格は



「僻地教育は教育の原点だという考え方があります。鳩間島で実感したのは、子どもも里親も、そして何より教師たちも大らかなこと。やはり競争心、ライバル意識が少ないのでそれがよい方向に生かせればと思っています」  
しかしあまりに地域密着型ゆえ、とまどうことも少なくなかったという。  
「たとえば運動会。生徒だけでやるうとしたり二時間足らずで終わってしまいます。ここでは島の人たちによる一般参加の競技が大事。この島では学校の行事はすべて地域ぐる

みで行われるといってもいいでしょう」

豊年祭、敬老会など、大人の行事と子ども  
の行事の境目が無い。どこまで学校として責  
任を持つべきか、そのあたりの境界が曖昧だ。  
さて、実際に子どもたちは島に暮らして変  
わったのか。

「生徒数が十数名という環境であれば、教師  
の目も非常に細やかに行き届くという利点は  
あります。幼少時代に受けたなんらかの傷を  
癒すことはできるでしょう」

しかし、中学卒業とともに子どもたちがこ  
の島を離れることは明らかだ。どんな環境で  
も大なり小なり問題は起こるはず。

「私はそこで通用する人間になれよと日頃か  
ら子どもたちに言っています。厳しい言い方  
かもしれませんが、これは基本的なこと。イ  
ジメであれ何であれ、避けては通れない」  
テレビをはじめとするメディアに紹介され

たことで、学校にも都会からの問い合わせ  
があるが、医療機関などがまだないこと、住宅  
設備がまだまだ整ってはいないことなどをあ  
げ、生活環境の厳しさについてまずは認識し  
てもらおうようにしているという。

### 海亀の子どもたち

私が島を離れようという日の午前中、民宿  
の四阿で、建次さんが海をじつと眺めていた。  
素面のときはいつも忙しく動き回っていた  
かまらないので、これは珍しい機会だ。と、  
急に立ち上がり、突堤の先までずんずんと歩  
いていく。

「海がね、いろんなサインを送ってくるんだ  
よね。タコが来たよとか、もうすぐ天気が悪  
くなるよとか。こっちはじつと見てるんだよ  
ね」

昨夜、「俺が酔っぱらったから豊年祭の準備  
は中止！」と叫んでいた人物とは思えない



東京からやってきた秋山  
さん夫婦。毎年この季節に  
は沖縄を旅しているという  
○堤防の先に立ち、海に思  
う建次さん



穏やかな表情だ。そういえば、今  
年の海亀の産卵を発見したのも建  
次さんだった。一昨年の台風のと  
きは、卵が流されないようみんなで困いをつ  
くった。今年、浜に新しい生命が誕生するの  
は豊年祭の頃だという。

「今、何が大切かって？ 難しいねえ、人を  
思いやることかな。子どもの世界だけじゃな  
くて、人類全体に、そういう気持ちが必要  
いような気がするんだよね」

民宿のおじい、公民館長、踊りの好きな酔  
っぱらいとさまざまな表情を見てきたが、き  
つと海を前にしたときが素顔の建次さんの  
かもしれないと思った。

文・写真/斎藤四葉



温水プールで遊ぶ山本さん親子。  
山本さんは京都市から移住してきた



# 逆転の発想が救った、 山とダム町の開発プラン

## 京都府日吉町

### 過疎化に拍車をかけたダム建設

モダンな駅舎となってすっかり様変わりしたJR京都駅。ここから山陰線に乗り換えて、目指すJR日吉駅まではおよそ1時間。私たちは途中のJR亀岡駅でレンタカーを借り、京都縦貫自動車道を走って日吉町へ向かった。

日吉町はかつては農林業で栄えた町。美しい山並みの裾野に、へばりつくように点在する小さな集落。山並みに沿って広がる方形の稲田。山を活かし、山に生かされてきた暮らしが今も脈々と続いているかのように、町は穏やかな緑の風景の中に溶け込んでいた。

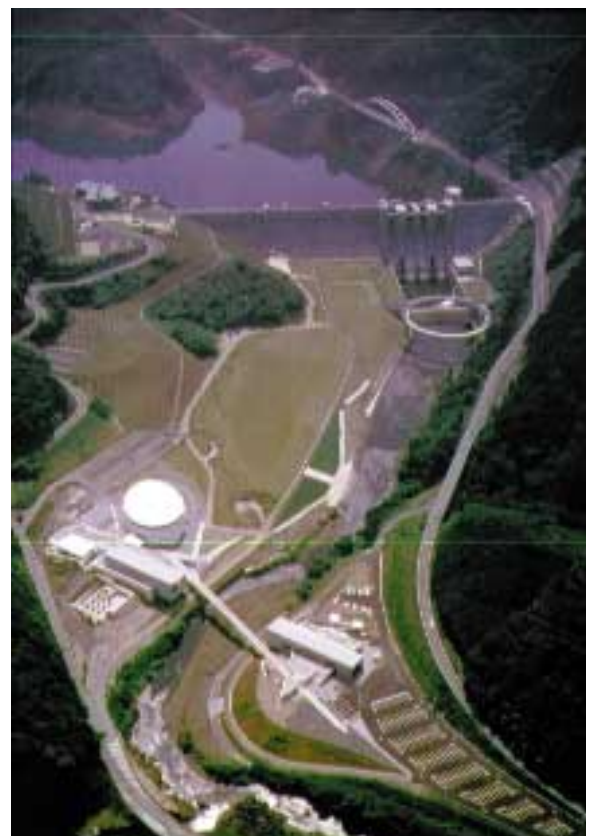
しかし京都市からたったの45km、都市近郊とも呼べる地域でありながら、生活基盤や交通網の整備の遅れによって立地の特性を長年活かすにきた町は、過疎化が進み、基幹産業だった林業や農業も衰退していく一方にあった。

そんな町にダムが建設された。構想以来37年、淀川や桂川の流域の治水と京阪神地域の利水を目的とした日吉ダムは、集落の水没など多大な犠牲を払って、平成10年に完成した。このダムによる水没で154戸の家屋約500人が移住。うち約400人が町外に移っていった。

昭和30年には9,000人強だった人口は、平成2年には5,862人にまでに減少する。過疎化に追い打ちをかけるような形になったダム建設。このダムを町の活性化に何とか活かそうと、日吉町が町をあげて本格的に取り組みだしたのが、平成3年度からスタートした「日吉ダム周辺整備事業」だった。

### 地域に開かれたダムへ

山沿いの道をダムに向かって走っている



と、町外かららしいクルマに何度か「スプリングスひよし」への道を訊ねられた。「スプリングスひよし」は日吉ダム周辺整備事業の大きな柱のひとつで、天然温泉や室内温水プール、レストラン、体育館などを備えた総合リラクゼーション施設。ダム周辺の施設の中でも最も人気の高いスポットになっているという。

ダムはその「スプリングスひよし」の奥に大きな姿を見せていた。ダムの背後に広がる天若湖は、甲子園球場の70倍という面積をもつ大きなダム湖で、周辺にはドライブやジョギングが楽しめるコースが整備されている。そして、自然景観への配慮なのだろう、切土面には樹木が植えられ、ダムは周辺の山々と連続しているかのように見える。

更に周辺設備の一貫としてダムの広報施設的な役割をしているのが、堤体内部に設けられたインフォギャラリーというスペース。日本で初めてダムの堤体内部を見学できるというこのスペースは、ダム建設の工程や、実際

周囲の山並みに自然に溶け込んだダム湖。右はその俯瞰



本格的な味とサービスの「レストラン桂川」



ひよし温泉は一番人気の施設



ダム建設の工程を展示したインフォギャラリー



年間1億円売り上げた年もあるという施設の売店



入浴後のんびり寛ぐひととき



ダムの様子が立体的に楽しめる堤体内部

ダムの下流、桂川を挟んで右岸と左岸に広がるのが「スプリングスひよし」。コンクリートのモダンな白い建物が、緑の山並みに映えて眩しいようだ。レストランやギャラリー、売店、交流サロンなどが入った左岸のウエルカムプラザと、温泉、温水プール、体育館などが揃った右岸のリフレッシュプラザは眺めの良い連絡橋で結ばれ、訪れた人々はこの橋を川風に吹かれながら気持ち良さそうに渡っていく。

この「スプリングスひよし」は平成10年の開業。町は第三セクターとして日吉ふるさと

と日吉町役場企画推進課の上島英孝さんはいう。

ダムの堤体内に入るとい体験は、他ではできない貴重なもの。ダムについての興味や疑問があれこれ膨らみそうな場所だ。

またビジターセンターの先にはキャンプなどが楽しめる府民の森があり、ここではダムの水没地区から移築復元したかやぶき民家も見学できる。

**「オープン以来黒字の続く  
「スプリングスひよし」**

のダム管理などを迫力ある手法で紹介し、ダムの売り物となっている。このインフォギャラリーの入場者は、オープン後の一年間で約55,000人。同じく水と人との関わりなどが学べるビジターセンターへは約22,000人が訪れたという。

この日吉ダムは、「地域に開かれたダム」の第一号として平成5年建設省から指定を受けた。

「地域に開かれた」というのは、水と緑の貴重な空間を開放し、ダムを暮らしの一部としてより身近かに捉えてもらおうというものです」



株式会社を設立し、「スプリングスひよし」の管理運営を全面的に委託してきた。土地建物は町のものだが、運営は100%日吉ふるさと株式会社によるもの。出資金の1億円は、町が66%、残りは日吉町の有力企業・各種団体などからで、母体からの出向者はゼロ。第三セクターではあるが、実態は殆ど民営といった形だ。日吉ふるさと株式会社は一企業としての厳しい目で、サービス業本来の在り方を探ってきたという。

「お陰さまで開業以来ずっと黒字続きです。従業員も現在52名。雇用の場の拡大という意味からも、町の活性化には貢献できたかなと思いますよ」

と話すのは、日吉ふるさと株式会社営業部長の近藤正也さん。近藤さんは東京の大手ホテルチェーンで長年ホテルマンとして働いてきた人だ。サービスのノウハウは知り尽くしている。そのノウハウを活かして、施設内の



府民の森にある郷土資料館、ダムに沈んだ家も保存。草刈りや剪定等「お陰で仕事が増えた」と笑うシルバー人材センターの人達



〇役場が今年から公用車として導入した電気自動車・プリウス。燃費もよ





町内外から2000人が参加する日吉ダムマラソン

2時間耐久三輪車レース

農作物が人気 ふるさと祭り

レストランや特産品を売る売店の売り上げを伸ばしてきた。

レストランでは料理もサービスもより上質なものをと、厨房のコックさんやウエイターは京都のホテルから抜擢した。メニューは日吉町の特産品を極力使って、構成した。みぶ菜つんどと椎茸そばが特に人気だ。

そして特産品販売の売店「里の市」では、やはり町の産品である黒大豆を使った菓子がよく売れる。売店の客単価は1、000円余りだ。

「30坪のこの売店で最高一日150万円、年間一億円売った年もありました」と近藤さん。売り上げの伸びは町の発展につなげていかなければと、日吉ふるさと株式会社では売店の品やレストランの材料、燃料、水道などは、極力町内の業者を使い、活性化に協力している。

そして、この「スプリングスひよし」で一番の人気は何といっても温泉だ。ここを訪れる多くの人がこのひよし温泉を目当てにやっ

### 100万人の都市交流をめざして

てくるといふ。泉質はナトリウム塩化物強塩泉という本格的な天然温泉。「大きな山を眺めながら入る露天風呂は、最高にいい気分」と、大阪からやってきた権藤勇・美智子さん夫妻は、湯上がりの顔をほころばせる。

温泉の隣には陽射しがいつぱいの温水プール。京都市内から京都縦貫自動車道を利用してやってきたという湯浅勝巳さん一家は、「何もない処だったけど、こういう施設ができる子ども大人も楽しめるので、有り難いですね。ダムを見て、プール、温泉、レストランと、一日楽しみました」と、満足そつだ。

平成9年には約3万人に過ぎなかった観光客が、平成11年には一挙に50万人近くにもなったという日吉町。過疎化に拍車をかけたといわれたダム建設。その完成から2年、ダムのマイナスイメージをプラスに逆転させた町の開発計画は、見事に功を奏した形となった。「スプリングスひよし」のオープンにあわ

せて宣伝広告にも5、000万円を投じた。テレビ、ラジオ、新聞、駅貼のポスターなど、さまざまな媒体を使つての訴求は成功し、それまで知られることもなかった日吉町の名は、広く周辺に認知されるようになった。

この知名度とダムの周りのダイナミックな自然の景観を活かした「日吉ダムマラソン」には、毎年町内外から2、000人を超える参加者が集まるという。町では他にも「一万人のふるさと音楽祭」や「2時間耐久三輪車レース」、「日吉ふるさと祭り」などのイベントを開催し、町おこしの気運を盛り上げている。

毎年初夏と秋に行われるかやぶきコンサートも町では恒例のイベントとなった。日吉町在住のドイツ人ピアノリスト・ザイラー氏と和子夫人によるピアノデュオは夫妻のかやぶき音楽堂で行われ、年間6、000人の来場者を集めている。こんな文化的な催しも今ではすっかり日吉町の顔となってきた。

京都縦貫自動車道の開通、JR山陰本線の電化など京阪神からのアクセスも良くなり、町への来訪者の数は年をおつて増えている。観光を核とした地域の活性化は、数字の上では確実に成功しているといつていいだろう。

「こうした数字が地域の振興にどれだけ寄与しているか。今後の課題は施設内での地元産品のさらなる消費拡大や、朝市の開催など。町全体の活性化をさらに考えていくことです」

と日吉町役場企画推進課の寺田茂樹係長はいう。

年間50万人近い観光客を迎えるこの町は、今100万人の都市交流を目指して町の魅力を高めていこうと頑張っている。

文・金山淑子/写真・満田美樹

右/民家を活用したザイラー音楽堂  
左/町外からも多数出かけてくる人気の「ひよし温泉」

○日吉町企画推進課  
S0771-72-1160





松山からシーカヤックの練習に来た男性。ふたみシーサイド公園にはシーカヤックスクールがあり、5月の末には長浜双海シーカヤックフェスタが催される。

夕焼けコンサート・夕日のミュージアム・夕日にコーヒー・夕焼けソフトクリーム・夕日夕焼けフォトコンテスト・夕焼けたこちゃん・夕日井など、夕日夕焼けづくめで地域づくりを進めている瀬戸内・双海町。

双海町の今日の賑わいは一朝一夕になったものではない。この仕掛人が「しずむ夕日を昇らした」夕焼け課長「進ちゃん」こと町役場職員若松進一さん(56)だ。

1979年、テレビ番組「明るい農村」で女性の参画を呼びかけた公民館活動の「夫婦学級」が取り上げられることになった時、当時公民館主事だった若松さんは「ディレクターを上灘駅に迎えにいった。しかし降りてこない、どうしたものか思案していると、駅前の商店から間違えて次の駅に降りたと連絡があった。車で下灘駅に急ぐ時、日没間近の空は茜色に燃えていた。

### 夕焼け課長「進ちゃん」のアイデア続々



## 夕日・夕焼けづくめで地域おこし 夕日を物語にした町

ふたみちよう  
愛媛県双海町



「双海の夕日夕焼けフォトコンテスト」の上位に入賞すると、絵葉書と名刺に写真が使用され、写真家には名誉な記念になる。

輝いている人々がいる魅力的なムラ



いまや全国に知られるまちづくりの名物男・若松進一  
地域振興課長。『昇る夕日でまちづくり』(アトラス出版)  
を出版して好評。下灘駅で夕日との出会いを語る。



下灘駅は当時「日本で一番海に近い駅」で  
山田洋次監督が映画「フーテンの寅さん」の  
冒頭で、寅さんの夢見る寝姿を撮影したベン  
チがある。ディレクター氏はそのベンチに座  
ってまさに沈もうとする。だるまの夕日」を  
みていた。「駅を間違えてラッキーでした、  
素晴らしい夕日ですね。こんな夕日、町の人は  
知っていますか」と話しかけた。若松さんも  
今までに見たどの夕日より綺麗な夕日に思え  
た。

この夕日がきっかけで、心に残る夕日がつ  
ぎつぎと脳裏に蘇ってきて、「夕日でなにか事  
業ができるかも」と直感した。それから暇  
を見つけて若松さんは、宍道湖・西伊豆・越  
前・留萌など夕日探しの旅をつづけた。

### 夕日の無人駅コンサートを 「まちづくり元年」に

1987年、双海町の「まちづくり元年」  
はスタートした。何かやりたいと青年たちが  
話し合い、うちの町でもコンサートをやろう  
と「夕焼けコンサート」が具体化、青年たち

が資金を集め、企画進行の中心になった。

圧倒的に演歌支持が高い地域だが、若松さ  
んは夕日にはトランペットやギターが似合う  
と出演者選定にこだわり、知人に日本フィル  
ハーモニーのメンバーを紹介してもらい内容  
を詰めていった。会場は下灘駅のプラットホ  
ームでやりたいとJRに申し出た。前例がな  
いと許可を渋るJRを説得し了解を得た。

双海町を通る予讃線回りは山回りの内子線  
が開通してから本線が内子線に移り、廃線も  
噂されていた。そんな海回りの無人駅が脚光  
を浴びることになった。

梅雨の晴れ間の夕景を背景に催されたコン  
サートは、1000人の観客を集め大成功を  
おさめた。後日テレビでも全国放送され大反  
響、夕日の町デビューとなった。

それを機に定住者と交流者で「まちづくり  
30人委員会」、「青年会議」、女性の「エプロ  
ン会議」、「役場まちづくりグループ」の4グ  
ループを組織し、それぞれの立場で町づくり  
を考えはじめた。毎月1回の学習会、講師を  
招いた研修会、また町内を再検証して過去・  
現在・未来について徹底的に話し合った。

「コスモス鉄道2001年の旅」企画では  
JRの車両を借り切つて、双海町と近郊市町  
村を見てまわるシンポジウムもおこなった。  
さらに「18時間マラソンシンポジウム」では  
白い立体模型を前に一般町民も参加して夢の  
構想を固めていった。なにをやっても周囲や  
マスメディアが「何やってるの」と覗いてみ  
たくなる楽しそうな仕掛けが続く。

「過疎化とか産業不振とか危機感をあおって  
町おこしをやっても長続きしない。21世紀の  
町おこしは、新しいこと、美しいこと、楽  
しいこと、この3つの要素が必要だ。楽しみ  
ながら実践していなければ人は来ません」と  
若松さんは言い切る。



### おばちゃん達の暖かさも包んで

「有限会社シーサイドふたみ」は双海町、  
農協、漁協、商工会、森林組合などの8団体  
が出資した三セク。開業以来黒字運営でます  
ます元気だ。特産品センター「ふたみん」  
ではオレンジベースの「夕焼けソフトクリ  
ーム」が年間1700万円売上げるヒット商品  
また「夕日にコーヒー」(別名 タ・日・日  
コーヒー)は新聞で「夕日コーヒーとUC  
Cのホットなコーヒー論争」と記事になった  
話題の定番商品。2階の「レストランタ浜館」  
では鯛の刺身に黄身をのせワサビたれで食べ  
る「夕日丼」。7時まで営業しているので夕  
日を見ながらの食事は最高だと人気のメニ  
ューになっている。

話題にことかかない「ふたみん」で際立  
っているのは漁協婦人部の練り製品コーナ  
ー。年間売上3000万円を超える勢いだ。  
訪ねた日は小雨の火曜日、「シーサイドふた  
み」は休業日だったが練り製品コーナーは営

### 夕日のミュージアム

天気が悪くて夕日が見えないときは「夕日のミュージアム」  
に入るとよい。夕日の絵画、夕日をつくる実験具など夕日の  
知識を楽しく学べる。「時の貴重さ」「夕日をつくりあげてい  
る自然」「人々が夕日に抱くロマン」を読み取ってほしいと  
若松さんは言う。米製アンティーク風オルゴールで「赤トン  
ボ」「夕焼け小焼け」などの童謡も聞くことができる。  
若松さんは、同館の水槽の掃除と海岸の清掃を週1回欠かさ  
ず続けている。

「シーサイドふたみ」の練り製品コーナーを運営する主婦たち（下）と上灘漁協婦人部代表の富岡さん（左）



業中で、トイレを利用するバス客や休業を知ってがっかりした客にお茶と試食をすすめ、「じゃこ天」、たこ焼き、夕焼けたこちゃん、季節限定コロッケなどを3人の主婦が丹精をこめて実演販売している。

営業を始めた頃、特製焼チクワの売上に四苦八苦していた。それを見た若松さんは、夕日の望遠鏡のキャッチフレーズを提案した。曇りの日もあるのでやや苦戦したが売上は上昇をはじめたという。いま蒲鉾の商品化を検討中だ。

上灘漁協婦人部代表の富岡喜久子さん(70)は、「この事業が始まるまでは漁協婦人部の活動は清掃とか行事に出店するくらいで表に出

て活動することはあまりありませんでした。この話があつて試行錯誤の苦労はありましたが、若松さんの知人の宇和島の蒲鉾屋さんが惜しみなく指導してくれたおかげで『じゃこ天』はシーサイド公園の名物になりました。婦人部の有志約20人がローテーションで当たっています。始めた頃は『じゃこ天売ってヨロツパに行こう』という『ハラッパ』（原っぱ）がいいとじゃない」と冗談言っていました。平成10年には『愛媛農林水産賞』を受賞、ますます弾みがついて売上順調、昨年皆で立山黒部旅行に行つてきました」と話

す。売店の壁に子供の手書きの感謝状が掛かっている。昨年12月寒い雨の降る日、松山市のボイスアウトの団体が40人、ハイキングの途中、食事と休憩に特産品センターの軒を貸して欲しいと立ち寄つた。寒さに疲れた子どもらを見て、おばちゃんたちは100人あまりに熱く熱々の「じゃこ天」をとっさに振る舞つた。「ほんとに喜ばれました。そんなことも忘れかけた5月の連休、自転車で乗つた子供らがこの感謝状と作文をもつて訪ねてくれました。皆、感激しました」と「じゃこ天」を揚げながらおばちゃん嬉しそうに話してくれた。婦人部商品の人気は「じゃこ天」や「季節限定コロッケ」の暖かさに、双海のおばちゃんたちの暖かさがトッピングされているからだ。

### 町中に花があつて、夕日が美しい

海岸を走る国道378号線は「タヤけこやけライン」と呼ばれ「ふたみシーサイド公園」の前後に季節の花が咲き誇るのも自慢だと若松さんは話す。減反のみかん畑を水仙畑にした老人の話、あちこちに自生するツワブキの話、線路沿いの菜の花の話…。鉄道の土手の

景観に菜の花を植えようとJRに提案したら、こぼれた種で咲く花はしかたないが勝手に植えるのは「だめ」との返事。では、とエプロンのポケットに穴をあけて種を入れ、「エプロン会議」の婦人らに歩いてもらった。10年たった今では「菜の花列車」「夕焼けトロッコ列車」も走り鉄道写真のマニアの撮影ポイントになっている。

また海岸国道沿い16aには、「まちづくり元年」に「まちづくり青年会議」が植えた桜とあんず、初夏にはアジサイ、夏の終わりから秋には酔芙蓉がピンクの大輪の花を咲かせ。四季絶え間ない花づくりはバーベナ栽培で「全国花いっぱいコンクール」国土庁長官賞に輝いた。

「日本一夕日の綺麗な町」を謳う双海町。それは沿道に花々を咲かす町民の心持ちと活動が夕日をより美しく映えさせている。

1997年、「地域交流会議」で夕日による町づくりも国土庁長官賞を受賞した。

文・写真/小林 恵



上/お年寄りが中心になって町内は四季折々の花がいっぱい  
下/ほたるも飛ぶようになった上灘川

○問い合わせ/双海町地域振興課  
s0899-86-1111



# 自然や動物、「たくさんの素敵な人たち」と 役重真喜子さんが移住した町

岩手県東和町

空想好きだった一人の少女は、自然や動物にふれる生活に憧れて育ち、気がついたら田舎暮らしに飛び込んでいた。「地縁、血縁の網の目に戸惑うことも多かったが、周りには沢山の素敵な人たちがいた。皆優しく、ちょっと悲しくて、たまらなく人間くさい。」 その女性とは役重真喜子さん（32才）。

霞が関のキャリア官僚の道を捨てて、研修に行った岩手県東和町でペコ（牛）飼いになった役重さんは、やがて結婚して一児の母になり、今は町の「いきいきまちづくり推進室」室長として多忙な日々をおくっている。

役重さんが魅せられた東和町ってどんなところだろう。そして生活者として、一人の母親としての視点で、子育てや農村問題にも取り組んでいる彼女の近況を知りたくて、出かけていった。

## 温泉に園芸療法を取り入れて

新幹線・新花巻駅から車で約20分という便利な地の利にある東和町。町の中心部は近代的な建物や人・車の往来が多い活気ある都会的な町である。しかし大変奥が深く、一步入ると、なだらかな丘陵の山々と水田や畑が連なる田園地帯。町のパンフレットには「豊かな水・緑・空気 まほろばの郷」と書かれているが、私は宮沢賢治のイーハトーブをイメージした。多分童話や文学が好きだった役重さんもそう感じたに違いない。

緑の美しい町はその日は雨。まずは、町民や近隣の人たちの社交場である東和温泉へ

出かけた。

東和温泉は「日高見の霊湯」として親しまれている北上山系の本格的な温泉で、町ではここを単なる温泉施設ではなく、総合的な交流の場として、また園芸療法のリハビリシステムを持つ温泉として機能させている。

6000㎡の面積を持つガーデンには300種5000本の日本では珍しい洋風植物や四季折々の草花が栽培されている。園芸療法は、植物とふれあうことで心身を癒し向上させるもので、特に高齢者の閉じ込めり防止や障害者の職業訓練の場として保健福祉施設や公民館等と併せて行われており、ガーデンはそのシンボル施設にふさわしい。

雨は農繁期の恰好の休息日、温泉は午前から大変賑わっている。経営は株という地域資源開発公社という三セクで、現在のドイツ風施設は平成8年にオープンした。隣にはJRが経営するフォルクローロ「いわて東和ホテル」があり、さらに広場をはさんで向かいには味処とうわ、豆腐、パン、ジャム、食肉加工等をする「東和ふるさと村」がある。

阿部渡事業部課長は「露天、サウナ、家族風呂等も整っていて、利用者の70%は町外の人なんです。町の人には無料の巡回バスを運行して温泉、病院、ライフケアセンター等へお年寄りが一人でも来られるようになっていきます。売店では町の伝統工芸品や加工食品などを売っていますが、こちらも好評で、町の特産品をPRするいい場になっています」と店内を案内してくれた。



日高見の霊湯、東和温泉と園芸施設。  
町内の伝統工芸品、さき織、ホームス





布を裂いて横糸に使用  
さき織の実習風景。

東和町ふるさと村  
(味処とうわより)



売店には、町内で作った和菓子やゼリー、キムチ、漬物に加えて「東和牛肉」、最近売出して人気のマトン(羊)肉やウインナー製品などが並んでいる。もう一つ目を引くのが伝統工芸品の「成島和紙」と「手さき織」商品、ホームスパンのネクタイや財布、マフラーなど。北国の人々の素朴な温もりを、現代人のお洒落感覚につくりあげた小物たちで、東和町にはクリエイティブな人たちが多いんだなと感心してしまう。

どんな人たちがつくっているのだろう、会ってみたくなった。

### 昔の人の知恵と技術を伝えたい さき織、ホームスパン

さき織は古い布の再生法として明治以前から各地で織られてきたもので、縦糸に木綿糸、横糸に細く手で裂いた布を使って織り上げる。布の不規則なよこ縞が素朴さと独自の風合いをかもし出している。

東和町でこのさき織を伝承し、若い人たちに教えているのが小田島秀子さん(80)。50歳の時、町のお年寄りから習い、以来30年間制作を続けてきた。後世に伝えたいと町内にあった機織り機も収集、仲間や若いお母さんに教えるうちに遠方から習いに来る人も増えてきた。

下浮田の山や田畑に囲まれた高台に「さき織伝承館」がある。現在の建物は二棟目で、織機が16台並ぶ広いスペースがあり、今までの民家をいかした建物は宿泊や研修に使用。

「さき織は、ものを大切に使うというリサイクル社会にもマッチしているだね。古い布を集めて、場合によっては染色をし直し、手で

裂いて横糸に使うんだ。体験教室ではこちらの用意しておいたものを織ってもらい、2〜3時間でコースターを2枚織って持ちかえってもらっています。指導できる後継者も何人かいるけど、その人たちも70歳位なので、まだまだ頑張らないとねえ」と小田島さん。現町長の母上だそうだが、買物があると自分で車を飛ばしてさつと町へも行くし、繊細なミシン刺繍も一手にこなす大変元氣なパワフルおばあさん。さき織のコースター、ランチヨンマット、手提げバッグなど、どれもやさしい温もりと手作りの色・風合いにあふれた逸品である。ちなみに体験教室の費用はコースター2枚つきで大人一人1500円、小学生1000円。

役場前に「ホームスパンハウス東和店」がある。ホームスパン製品の数々を展示販売しているほか、機織機3台を置いて体験講座も開いている。HOMESPUNは家庭で糸を紡ぐという意味で、スコットランド生まれの伝統織物。厳選した羊の毛を手で染めて紡いで織上げたやさしい風合いと格調を持つ。明治政府が日本でも作れないかと北海道、長野、岩手に技術導入を計ったが、岩手を除いて後継者不足等で断ち切れ、現在東和町と盛岡市に残るのみとなった。当町に本社を持つ株日本ホームスパンは本場スコットランドから技術者を招いて世界有数の高級織物としての地位を築き、町の誇りある地場産業のひとつに育てた。ುತ್ತとりするような肌触りと高級感、親から子へ残すという英国人の暮らしが見えてくるようだ。

### ベコに代わって山羊、羊を

役重真喜子さんは、ベコ(牛)を飼いたく東和町にやってきた。研修先の牧場主が広い他の土地へ移住することになり、オーナー



上/さき織を指導する小田島さん  
下/日本ホームスパン東和本社の  
展示、実習室

として預けていた花子、美登利という雌牛を引き取る。牛舎建築の場を提供してくれたのがご主人となつたカズちゃん。著書『ヨメより先に牛がきた』(家の光協会刊)には人や牛との出会いや、東和町の住人になつた経緯などが書かれていて、彼女の文才にも驚嘆したものである。役場に勤務するかたわら、朝は主としてご主人、夜は役重さんが牛の餌やりをする。餌やりしてから役場に帰って仕事をするという生活だったが、美登利も花子も子供を生み母親として立派に成長していく。そして役重さんも長男幸寛君を出産した。

しかし長年の過労働や新しい生活等でダウン、長期入院する。やっと退院すると、その間牛の世話をしてくれていた義母が入院とい

いきいきまちづくり推進室  
長の役重真喜子さん







右/小菅さんの家のサホーク羊たち。  
左/アグリトピア公社で白バラを栽培する  
熊井さん。職員は通常8名だが、多忙期に  
は20名ほどのパートさんも来る。

う事態になり、多くの人たちに助けられながらも牛たちは知り合いに買い取ってもらった。今は牛に代わって山羊の親子を飼っている。

「母親はスワン、子供は小雪というんです。ミルクがいつぱい取れて、一日に鍋二杯にもなります。山羊の乳はおいしくて栄養価も高いので家族皆で飲んでいますが、飲み切れずにバターやチーズ、ヨーグルトなどを作っているんです。山羊は雑草を食べて人手も余りかからないために、最近は観光地等でも飼育されています。

私は、もう一度ベコを飼いたい、畜産を伴った農業をやっていきたくて常に考えているんです。でも間もなく次の子供の出産もあるし、役場の仕事も魅力的だから、すぐというわけにはいきませんね」と役重さんは言う。

岩手県は畜産、高級和牛の先進地で、東和町の牛肉は銘柄品として人気があるが、有機米の稲わらや良質な乾草でいねいに育成する手間は大変なもの。外国産の安い牛肉の影響も大きく、目先を変えてみようとするサホーク羊を飼う農家も出てきた。ジンギスカン用、純毛布団用に人気があるという。町内では6軒が飼い、総数70、80頭になっている。

サホークを飼う小菅良悦さんの家を訪ねた。牛なら4、5匹の牛舎も羊なら25頭でもゆったりしている。貴婦人という雰囲気美しくおとなしい羊で、子供は一年半で成人して出産するという。「必ず双子を生むんです。手間も牛に比べるとかかりますから、高齢者の畜産家でも飼えますね。今は飼育農家と協議して、全体で月2頭、年24頭だけを出荷しているの、趣味で飼っているようなものだね」と小菅さんは羊を撫でながら語った。毛は荒いためにホームスパン用にはならないが、福島業者が布団用に購入していく。

### 里の味や自然を生かして

町の農政課が力を入れているのが、地元の農産物品を生産者自らが加工し、消費者に見える形で提供すること。「東和ふるさと村」は平成11年にオープンした近代的な設備を持つ加工工房で、一般の人もチャレンジする「おためし工房」もある。

ここで出来た商品は川崎市にある産直センターでも売られており、産直という流通システムは、町とJAが出資した「とつわ大増」が企業感覚で行っている。

さらに三セクといえば、見逃せないのが「アグリトピア公社」。高齢化や担い手不足による農地の荒廃を防ぎ、新作物の導入や農作業の受委託をはかることを目的に平成4年に設立した。現在新作物としてシエアを伸ばしているのがバラの施設栽培。とくに同社の主力商品の一つである白いバラ・エスキモーは、花弁の豊かさや香りで、祝いやパーティーに人気がある。案内してくれた熊井技術員は「バラは色も品種も次々開発されて、その産地も全国に沢山あります。そのため敢えてシンプルなお白いバラに取り組んでいます。ただし、開花してからではだめ、蕾がふくらする頃を見計らって切り取ることが大切です」と言う。広大な敷地内では開花を見逃してしまうこともあり、これらはドライフラワーにして客に提供することも。

### 子供たちに豊かな環境を

町の各所を取材してみても、東和町民はチャレンジ精神が旺盛、それを町や関係団体が事業としてしっかり支援していることを実感した。

役重さんが室長を務める「いきいきまちづくり推進室」は、男女共生、女性の社会参加と男性の家事分担等をテーマに設置された部



総合福祉センターの一室に設けられた子ども遊び広場。小学生約30人が通ってきており、お母さんが交代で世話係をしている。

署だが、彼女がもう一歩踏み込んで取り組んでいるのが、子供たちの豊かな環境づくり。「私の子供も4歳になり保育園に通っています。朝は私か夫が送り、お迎えは義母さんをお願いしていますが、田舎では祖父母などがあると午後3時半にはお迎えなんです。だからといって子供がいつも祖母のまわりには仕事邪魔にもなり、私か夫の帰る時間までテレビなど見てもすごしてしまいます。近所の園の遊び仲間は何キロも離れていて、幼児の足ではいけない距離。一人で土手や川遊びすることに限界があります。田舎の子供は皆似たような状況にあり、田舎にいなながら楽しく育てることが難しい。

これは子供のせいでも母親のせいでもない。地方の過疎町村がかかえる構造的な問題です。何とかしたいと、とりあえずお母さん達と自主運営で「子ども遊び広場」をはじめました。子供たちは福祉センターまで30分歩いて通ってきて遊んだり学習しています。他の地区にも早急に設置したいですね」と語る役重さんにはやさしい一人の母親の姿があった。子供たちの賑やかな声のする町、心から望みたい。

東和町総務課 80198(42)2211  
文/浅井登美子 写真/小林 恵





戦後、住民の手で建てた大河原中学校  
 ○「延齢草」を営む野花さんとご主人の  
 明徳さん ♪アルプ・カーゼの山羊



## 南アルプスの山里でゆったり自適に暮らす 校舎は交流と農業体験の場に 長野県大鹿村

おおしかむら

**村民の希望と労力を結集した校舎  
 解体するわけにはいかない**

玄關のガラス戸を開けると、広い土間と下駄箱、磨き込まれた木の廊下がお出迎え。懐かしい木造校舎である。二階へ通じる階段からいまにも子供の足音や声が出てきそうだが、柱時計は9時10分を指したまま止まっている。時を止めて、ここでは午後の日溜まりの中で、しばし休息を楽しもう。

南アルプスの山深い高原で山羊と乳牛を飼い、こだわりのチーズを作る小林俊夫さんは、仲間の協力で廃校だった校舎を移築して、宿泊施設「延齢草」として再生した。宿を営むのは長女の野花さん。地域の人達の熱い思いを明日に託した場所でもある。

「延齢草」は、戦後間もなく建設・開校した大鹿村大河原中学校の木造校舎を移築、復元したもので、平成9年の夏にオープンした。大河原中学校は戦後の新憲法のもと、戦争

を体験した大人たちが子供達に未来の希望を託して新設した学校だった。当時は建築用物資が極端に不足していたので、村民が総出で資材を調達し、汗と労力をふりしぼって校舎を建築した。子供たちも校庭の整地などに加わって一生懸命働いたという。終戦の年に生まれた小林俊夫さん（56）だが、新校舎建設の話を経たから聞いていたので、中学生になるのが憧れだった。

校舎は新生日本の民主主義の門出にふさわしいものだったのでしょう。とはいっても、村には財力もないし、建設会社も人手不足。住民が自分の山から木を切り出して提供し、製材も大工も自分たちで行ったんです。婦人会の人達も大豆を作って売ったり、兔を飼って資金の足しにしたそうです。着工から半年で手作りの立派な校舎が完成。昭和24年に開校しました」

大河原地区は村の中でも住宅が多い中心部。多い時は150名の生徒が学んでいた。しかし40年代から若者の流出や住民の移住がは

じまり、次第に生徒数も減ってきた。そのため村では2校あった中学校を廃校し、統合中学校を開設した。

もっとも当時は、小学校は地域の核的存在として廃校には慎重だったが、中学校は生徒の社会性、協調性を育む目的から統合化が各町村で競って行われていたという背景もある。

生徒はいなくなったが、地域住民の交流やスポーツの場として時々活用されてきた校舎が、平成7年に解体されるという通知を村から知らされた。「大鹿村の貴重な文化遺産でもある。この豊かな時代になぜ残せないのか」と小林さん達は村に移築保存を要請したが、村は校舎保全の整備には三千万円、移築には一億円かかる、解体しかないという返事だった。年寄りは皆「壊したくないよねえ」と言い、元教師も「あの学校は残さなきゃいかんぞ」と言ってくる。こうなったら自分でやるしかない、小林さんは移築・保存を決意した。竹馬の友である大工棟梁の赤須善雄さん、農業の宮崎彬さん等が協力を名乗り出てくれ、他にも大河原地区の人達が土日には手弁当で解体や運搬、新校舎づくりを手伝ってくれた。



校舎を移築再建した「延齢草」





▷ 厨房で夕食の準備をする  
野花さんと食堂(下)  
○ 人気のチーズフォンデュ



### 校舎の床・壁板を一枚一枚剥がして運搬

新たに移築する場所は、里から一段上の見晴らしのよい丘で、小林さんの牧場近く。土地は宮崎さん等が農地を提供してくれた。解体から再生までを指揮したのは棟梁の赤須さん。素人の助っ人を見事に使いこんで、最後には皆を大工見習生の腕前にしてしまったというリーダーとしての才覚を發揮した。

小林さんは、早起きで山羊や牛の世話、乳搾りを行い、8時から夕方5時まで工事現場で作業、チーズづくりは夜中に行うという生活を8カ月間行なった。

校舎の建物はそのまま移築すると膨大な費用がかかる。そのため板、床、柱を丁寧に剥がして運び上げ、それに新たに床にマツ材、壁にスギ材を足す等して接客用にふさわしい校舎に改修した。小林さんは木材用に自宅の山の木を切り出して使用した。

広々とした厨房と食堂。「厨房は職員室、食堂は校長室と放送室だったんです」と野花

さんが説明してくれる。食器等は、宿泊者が自炊できるようにとセンスのよいものがたっぷり新調されている。

2階には2室の客間と教室がある。ピアノ、遊具施設、沢山の図書(主として小林さんの蔵書)のある広い一隅に、子供たちが座っていた椅子と机が置かれている。この板張の教室は子供たちの恰好の遊び場になり、会合やグループの人達の寝室にも活用できる温もりにあふれた広間となっている。

一階の渡り廊下の奥が浴室、洗面室等。風呂は小林さんの同級生有志が寄贈、風呂や玄関タイルは小林さんの家に入りにしていた元信州大の学生たちが寄贈してくれた。庭で栽培するハーブを入れて清水を沸かした風呂は天然温泉に匹敵する心地よさで、窓から眺める赤石の山々と水田や野草等が素晴らしい。

一階の玄関に近い壁には、戦後間もない頃に学校づくりをした人々の写真や、延齢草を建築した時の作業風景写真が展示してあった。瓦ひとつを剥がすのにもどれだけ大変な作業であったか偲ばれる。校舎は約半分の大ささになったが、住民や子供たちの思い出が詰まった古くて新しい施設になっている。大勢の協力で出来上がった元校舎だが、小林さんは約3000万円の建築費を捻出した。

村民の文化遺産である校舎は体験宿泊施設として活用され、地域の人達の交流や都市の人達が農業や林業を学ぶ場になった。

「延齢草」とは深山に自生する植物で、歳を延ばすといわれる薬草。大河原中の校章にも使われていた。

### 校舎の再生は村の将来を思う お父さん達のプレゼンテーション

この日は近くの山で、小林さん、赤須さん、宮崎さん、佐藤明穂さんは鹿よけの柵づくり

作業。作業を終えて汗びっしょりの4人が「延齢草」に集まり、酒盛りがはじまった。「今年は雪が多くて民宿も閉鎖したが、山も異常だったらしい。鹿や猿が早くから里へ下りてきて、牧草や野菜の新芽、稲の苗などみんな食べてしまう。これだけ山が深い村なのに山奥では餌になる植物が不足しているのかなあ」と男の人達は心配している。

そういえば、小林さんが営む「アルプ・カールゼ」で、山羊用の放牧地が機械で剪定したように草がきれいに刈られていた。柵を越えて鹿がやってきて食べたものらしい。

大鹿村は古くから鹿が塩を舐めにくるという山と豊富な温泉があり、「鹿塩温泉」「小渋温泉」などの温泉宿が周辺の人達に親しまれてきている。いまは公営の宿泊施設や民宿も出来て温泉&山村情緒を求める観光客も増えてきたが、もう一つ赤石の巨峰をめざす登山者たちの拠点として親しまれてきた村でもある。

そんな山男の一人が佐藤明穂さん、野花さんのご主人である。東京生まれの神奈川県育



鹿よけの柵づくり作業を終えた男衆が「延齢草」のベランダで酒宴。左から小林さん、赤須さん、宮崎さん、佐藤さん、宿泊客の吉原さん。手づくりのテーブルや椅子が素晴らしい



○山羊も愛想よくお出迎  
え。乳搾り体験をする東京  
から来た吉原妙子さん



ち。4年前に登山で大鹿に来て野花さんと知り合い、熱愛の末2年前に結婚した。ひとつづ種のみづきちゃんも生まれ、現在村内の建設会社に勤めている。

エリート企業マンと長男という立場を捨ててこの村の住人になった、そのあたりの決意や新住民としての感想を聞くと、「そんな俗っぽい質問はしないでくれ」という返事が返ってきた。

野花さんと明穂さんは村の中心部にある村営住宅に住んでいるが、建物はどこにもよくあるプレハブ。「山林の村で木材も豊富、腕のいい大工も沢山いるのだから木造住宅にすべきだった」という話が誰からもなく出た。

「村一番の製材会社が経営危機になつてい  
るんです。地元の木材、間伐材を使った林業・建設業をもつと本気でやつていかないとけない。我々大工や土木業の仕事は、二年先まで決まつている程あるけど、村全体の農林業を振興していくことが一番重要だと思つね」と赤須さんが言う。

学校校舎の再生は、村の将来を思つたお父さんたちのプレゼンテーションともいえる。

延齢草は、山羊や牛とふれて乳搾り体験したり、田植えや稲刈り、木工づくり体験などをするグリーンツーリズムの場として活用していきが、まだPR不足や受入れ体制も完全とはいえず、これからが本番。山羊にさわつたり乳搾りさせてもらった体験は大変感動的であつたが、次の機会にはぜひ赤須さんからテーブルや椅子づくりを習い、宮崎さんから農作業を習つ、そして小林さんからはこだわりのチーズづくりを教えてもらいたい。単なる体験教室ではなく、人生の大切な重いものを学ぶことが出来るような気がする。

### 山羊と奥さんを連れて里帰り

今は高原で山羊や乳牛を飼ひ特製のチーズを作つている小林さんだが、若い時は二男ということもあつて家をとびだした。「渡世をして世の中を学びました」という小林さんに、「帰つてきた日のことは今も忘れないね」と赤須さんが言う。

それによれば、彼は一トントラックに一匹の山羊と、隣に若くて美人の奥さんに乗せて帰つてきた。奥さんのお腹には野花さんがいたというから、家族三人を連れて帰つてきたことになる。しかも彼はいきなり山の上の方を開拓して牧場を始めた。26才の時である。奥さんの静子さんとは研修先の筑波の牧場で知り合つたらしい。

二人の娘を育てながら7頭のホルスタインを飼育し、山羊は子供たちの遊び仲間だつた。「山羊は昔から農家が一頭位は飼つていた歴史のある家畜なんです。女房が体を悪くした時、山羊の乳で体力を回復させた。山羊の乳は人の母乳に最も近くて栄養があり美味しいんです。酪農ではずっと新鮮な草を食べさせることにこだわつていて、市販の飼料やサイロで貯蔵した餌をやることに抵抗がありまして。ならよし、本格的に山羊飼いをしようと思つたんです」

スイスへいってチーズづくりを学んだ。子供たちが大型トラクターを運転したり、各家が自慢のチーズを作り山の実を摘んできて自家製のジャムでもてなす。そんな風土にも感動し、やがて「アルプ・カーゼ」(山のチーズ)工房誕生へと夢を実現していく。

「アルプ・カーゼ」の建物は山から木を切り出して作ったログハウス風の家で、二階が住まいと訪ねてきた人達のサロン・休憩室、一階に牛舎とチーズ工場がある。現在牛が5



翌朝は5時に起きてさっそうと山羊・牛の世話をする小林俊夫さん

頭、山羊が子山羊を入れて8頭、それに鶏が約20羽。山羊も鶏も放し飼いになつていて、訪ねた私たちを愛想よく迎えてくれた。笑みを浮かべて対応するオスは威厳ある家長でもあり、可愛い声でなく子山羊たちはベツトにしたいほど。ここの山羊たちは飼ひ主に似て森の哲学者一家という雰囲気だ。

山羊の生乳は、まったく癖がなくさっぱりとしてまるやかな味。こんなに美味しいものとは知らなかつた。山羊と乳牛の乳は直ちに65度で低温殺菌して乳酸醗酵して酵素で凝固、成熟醗酵させていく。早くて3カ月、最高で一年寝かせてマウンテンチーズが出来上がる。草を食べるのびのび育つている動物たちと小林さんのチーズへのこだわり、それに山の風土が加味してか「アルプ・カーゼ」のチーズは大変美味しい。手作りの深い味わいと独自のコクがある。量産出来ないので市販していかないのだが、ファンが工房へ買い求めにやつてくる。

「延齢草」へ宿泊すると、この貴重なチーズをたっぷり使つたチーズフォンデュと山菜やハーブのサラダ等が夕食に登場する。高原の爽風と降る星を眺めながら味わうチーズ料理は絶品で、会話も酒も一段とはずんだ夜となった。

・延齢草 TEL 0265(39)2818  
FAX 0265(39)2818

文・写真/浅井登美子





—ツ瀬川の清流で遊ぶ家族たち

### 参加者の声が 村民に自信を 与えた

宿の縁側から見る一ツ瀬川の対岸には、険しく切り立った緑深い米良の山々が雨に煙っている。西米良村は、ワーキングホリデー制度を始めた時から「カリコボーズの休暇村」を村づくりの基本コンセプトにしている。村の御意見番でもある西米良村教育委員長を務める中武雅周さん(80)に、カリコボーズの精神を聞いた。

# ワーキングホリデー制度導入から5年 自然と人が魅力的カリコボーズ の休暇村

宮崎県西米良村

過疎に悩む自治体の多い宮崎県の中でも、最も過疎といわれる村が西米良村。交流人口の増加を願い、全国に先駆けて始めた「ワーキングホリデー制度」が5年目を迎えている。

今年度から始まった第四次長期総合計画では、4年間の実績をふまえた上で、旧領主菊池氏の歴史を活かし精神面を村づくりに盛り込んだ。この夏、過疎地だからできる発信にこだわる西米良村を訪ねた。

「このままいくと西米良村が無くなる。そんな危機感から始まったのです。人口が減るといふのは現実として受け止めよう。その上で、定住化とともに交流人口を増やそうという考え方でした」

ワーキングホリデーを始めた5年前を振り返る西米良村企画商工課黒木啓介課長(53)の表情に、今では自信がにじむ。

西米良型ワーキングホリデー制度は、特産品のユズや花卉栽培で季節的に人手が不足する時、ワーキング参加者に仕事を手伝ってもらい、農家から報酬を支払う制度である。その間ゆっくり滞在してもらい村民と交流を深めることで、西米良村の魅力体験してもらいたいとのねらいもある。報酬は、一日実働7時間として、最低賃金の時給600円で設定、一日4200円となる。この賃金で一日3000円の特別料金でキャンプ場のログハウスに泊り食事をまかなう。参加者は交通費だけで休暇を楽しむことができる仕組みである。

地元では最初「何もねえ所に来てくるっとなじるか」という不安を抱いていた。しかし、参加者の答えは明確だった。「何もなくても、何もなくても、西米良そのものに自然も人も魅力がある」

ズは心の透き通った人にしか見えんとす。目に見えないものに学ぶという教訓なんですよ。自然を友として生きる民族の教訓と申す市に無いものがある。山の中は、山であることの大切さを考えなければ」  
春の彼岸に川に下って水の神となり、秋の彼岸に山に上がって山の神となる、それがカリコボーズ。西米良村に古くから伝わる河童伝承である。



カリコボーズ伝説を語る中武雅周さん



天包高原から見た西米良の山々と小山城址(右)



「そんな参加者の声に、私たちが自分の村の魅力を認識したのです。それが村民の自信にもなりました」

初年度は「せっかく来やつとやから、何かせないかんど」と、ワーキングホリデーの参加者をバレーボール大会やマージャン大会などにも連れて行った。しかし最近では、「空気の良い所で仕事を。土と触れる。それだけで満足。おばちゃんたちの人情に触れてリフレッシュ」と言ってくれる参加者の声に自信を得て、「ワーキング・アンド・ホリデー」ではなく「ワーキング・イズ・ホリデー」の考え方で良いと思い始めている。

### 145名がワーキングで来村

天包山(1188m)の頂上近く、標高900mに建設された天包高原花卉団地には硬質ハウスが建ち並んでいる。ワーキングホリデーをハード面で支える8つの庄建設プロジェクトのひとつ「花づくりの庄」である。セルトレーにパンジーの種を蒔き終えたばかりの花弁農家中武啓幸さん(58)がワーキング

ホリデーを受け入れるのは12月から3月までの間だ。

「スイートピーの出荷時期は、家族では手が回りませんから、ワーキングホリデーの方にお願いしています。でも労働力というより一番の目的は交流と情報交換。昨年は、夜の交流の部が弾んで結局うちに泊られました」

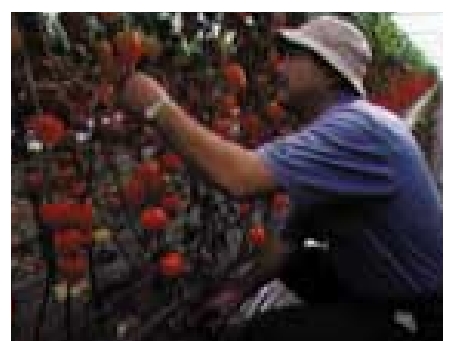
ワーキングホリデー参加者に任せられる仕事は、スイートピーの管理作業でも限られてくる。脇芽をとる、巻きヒゲをとる、下葉切りなどだ。技術的に難しい出荷のための花切りは農家が自分たちでする。

「花の時期を判断して切らないかんから。ワーキングの方の滞在は、平均して3日間くらいですから、その間では覚えられんです」

ワーキングホリデーを受け入れる農家は現在、花卉生産農家6戸、ユズ栽培農家2戸、ユズ加工所が1社の9戸である。今年3月までの4年間で145人の参加者があった。「えらいな反響でびっくり仰天。わずか半年で全国に知れ渡りました」

黒木啓課長は、当初「60歳以上の方がご夫婦で来られるのが普通」と考えていた。しかし実際の参加者は、独身で30歳以下の女性が6割近くを占めた。滞在日数は、3日間と4日間が最も多く、合わせて約54%を占める。長い人では、10日間の滞在。宮崎県内からが最も多いが、遠くは東北、北海道からも9人参加している。

7月の盆前、出荷の最盛期を間近に控えてワーキングホリデー参加者の姿が見えるはずのほおずき生産農家。毎年ワーキングホリデーを積極的に受け入れている中武勝文さん(48)だが、今年長男が家業を継ぐつもりで帰ってきたことと、連作障害が出て作業量が減ってしまった。そこで、今年ほおずきの管理は家族でどこまでできるかやってみよう



上 / 中武啓幸さんの花卉団地  
下 / ほおずき作りのベテラン中武勝文さん  
「ほおずき市」でも人気の高級品だ

うと頑張っているところだ。

「ワーキングホリデーの方は一生懸命してくれっすよ。コオロギ、バッタ、ミミズ、そういうものがある中、夫婦で参加して汗を流すことで普段見せん姿が見えてくる。父ちゃんやさしかったやねえ、となるみたいですよ。西米良の農家は、都会に出て行った親戚を盆と正月に迎える本家の接待のノウハウを持っていきますから、お客扱いはしないで」

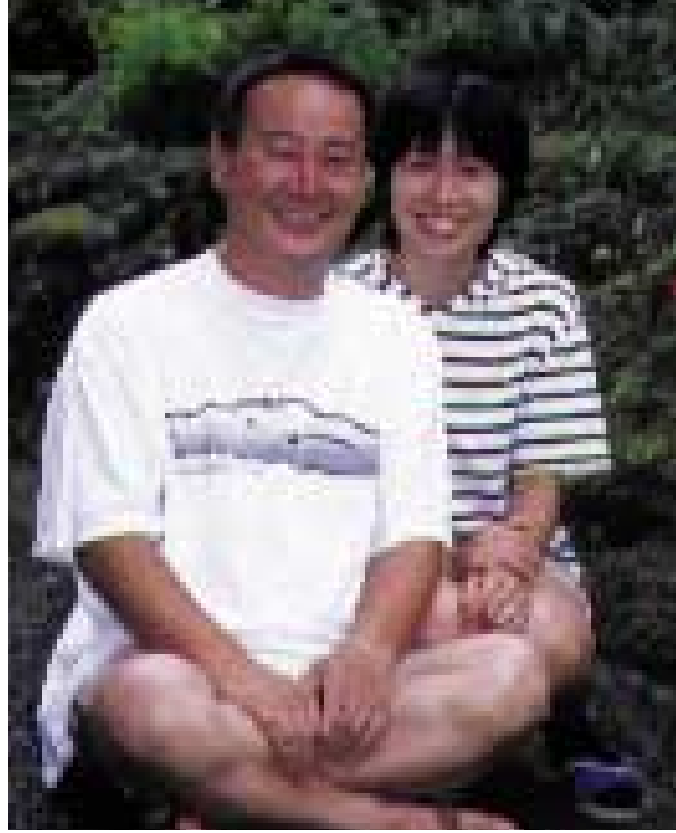
伝統的に持っている接待ノウハウが、農家とワーキングホリデー参加者との絶妙の間合いを保っているようだ。

「失敗もありますよ。最初に福岡から来た人やったけど、ユズを加工用と青果用に分ける選果を頼んだです。だけど、彼が言っには、スパーにもっと汚いのが青果用で売っているから加工用にはせんでいいと、全部青果用になってしまっって選別にならんとですよ。気持ちはうれしいけど」

### 新婦は京都から来たワーキングさん

村では今年4月、勝文さんが「場外ホームランやった」と言う出来事があった。

西米良村トレーニングセンターで、村の人



≪人気の西米良温泉「ゆた」と≫ 露天風呂

口1550人のうち320人が出席して結婚式が行われた。新婦は、昨年6月ワーキングホリデーに京都から参加した浜砂昌子さん(27)である。仲人はもちろん村長。ケーキカットは手づくりケーキ。会場を飾った花は西米良の花。

「村の皆が祝福してくれていると実感しました」

昌子さんの旧姓は、友田。今も村人からは「ともちゃん」と呼ばれている。前の仕事をやめたばかりの時、本屋でワーキングホリデーの特集記事をたまたま見つけて応募した。「旅をしたいなあと思っていました。お金もなかったのでワーキングホリデーに興味がありました。労働力として、あまり期待されていらないという内容でしたので、気持ちの負担は少なかった」

出荷のできなかったパンジーやビオラの鉢を片付ける仕事を、約半月間手伝った。その農家の長男が夫の浜砂誠二さん(45)だったのである。

「汗をかいて働くのは初めて、働いているなあという実感がありました。半月の間、仕事はあきませんでした。ソフトボール大会やミニバレーの練習にも参加して、村人が気軽に声を掛け合っていて、人の繋がりが濃いなあと思いました。一年たった今も、その印象は変わらないです」

昌子さんは現在、村の老人福祉施設で事務職として働いている。

この結婚は、村づくりの基本的な目的である「誇りを持って住み続けられる西米良づくり」に象徴的な効果を与えた。しかし、これほど象徴的ではなくても「カリコボーズの休暇村・米良の庄づくり」の効果は、数字にも表れている。

### U・イターナー者が73人に

昭和35年の村人口は5586人。それが、ワーキングホリデー制度を始める前年の平成8年には1651人まで減った。その後も減少を止めることはできないが、毎年約4%減で止まっている。40歳までのUターンとイターナーを合わせると、この4年間で73人にもなる。もちろん村として定住化の基本整備にも力を入れてきた。ハード面でワーキングホリデー制度を支える8つの庄建設プロジェクトのひとつ「街づくりの庄」である。村の中心地区の下水道を完備。山村定住用の住宅建設。若者住宅の建設などである。

若者の定住化を進める上で、平成7年に村が出資して設立した第三セクター(株)米良の庄の果たす役割は大きい。ワーキングホリデーの窓口業務の他、米良の庄が運営する施設は小川城址公園、湖の駅、双子キャンプ場、それに平成11年度にオープンした西米良温泉「ゆた」とである。社員が14人、パートが25人の職場だ。このうち21人がUターンとI

ターンである。施設の利用者数も西米良温泉ができてから飛躍的に伸びた。温泉ができる以前、平成10年の施設利用者数は3万1713人だったが、平成12年には15万0281人にもなった。ほとんど日帰り客であるが、「肌がすべすべになる」「露天風呂から見える風景がいい」と県内で評判である。

(株)米良の庄の黒木伸亨総務課長(56)は、現場の先頭に立って土曜も日曜もなく働いている。

「西米良らしさは、やっぱり川と山でしょうからね。現在の西米良は伝統から派生した暮らしが、どこかでぶつりと切れているように感じますよ。ね。(米良の庄づくりも)伝統に裏打ちされたものでありたいですね」

ハードの充実が優先する傾向や、利用者の数で評価されがちな行政の体質。そんな大きなうねりの中で、黒木伸亨課長は、西米良らしさとは何かと自らに問いかけている。現場で先頭に立って働く責任者だからこそ抱く不安なのかも知れない。

5年目に入った西米良型ワーキングホリデー制度。「川遊びの庄」や「匠の庄」「交流・滞在の庄」などハード面の整備は今後も進める計画だ。

それと同時に、明治維新までの約200年間居城した旧米良領主の十七代菊池則忠公が、明治2年の版籍奉還の際、領地を全て領民に分け与えたという遺徳から学ぶため「菊池氏の薫陶」を新たなコンセプトに掲げた。

ワーキング参加者の希望日と農家の日程が合わないなど、課題はまだ残っているが、村を支える歴史や風土に目を向けた西米良村のワーキングホリデー制度を柱とした「米良の庄づくり」は着実な歩みを進めている。

文・写真/芥川 仁





右 / 独特の造りを持つ江戸屋の建物は明治10年に建て替えられたもの。  
中 / 講中宿・大黒屋の石仏  
左 / 身延往還の宿場町、赤沢宿



貴重な風土と文化財を  
21世紀へ

# 上流域の意味と価値、そこで暮らす人々の未来を考える

日本上流文化圏研究所・赤沢青年同志会  
はやかわちょう  
山梨県早川町

山梨県の市町村の中で「元気印NO1」といわれる早川町は、地域おこしが活発だ。その核ともいえるのが「日本・上流文化圏構想」。山間地域（上流域）の暮らしや生き方を考え、新しい文化や町づくりを目指している。町並み保存に貢献した赤沢宿・青年同志会の活動とともに取材した。

## 川と山を守り 地域での生き方を探る

梅雨の晴れ間の青空に、南アルプスの緑濃い山々が連なつて見える。その雄大な姿を右手に見ながら国道52号線を南へむかう。めざすは、山梨県の南西部に位置する早川町。面積の96%が山林というこの山あいの町に、「川の上流域について考える」ユニークな研究所があるというのだ。

「日本上流文化圏研究所」は、役場からほど近い交流促進センター内にあつた。応対してくれたのは事務局長の大倉はるみさんと研究員の鞍打大輔さん。

「これまでの町づくりは、都市に追いつこうと、企業を誘致したり、産業を興すことに力を入れてきましたが、その結果、自然や文化など地域の大切なものがどんどん失われていきました。そういう町づくりの考えを改め、自然との関わりの中で培ってきた生活文化を見直し、今後、自分たちがこの地域でどう生きるべきかを見つめ直すぞうというのが、この研究所のねらいなんです」

と鞍打さん。川の上流域は、最も純粋な水を天から受ける、いわば「いのちの源」といえる場所。その源である「上流圏」に光を当て、新たに本質的かつ普遍的な価値を創造していく。それが日本上流文化圏研究所の理念だという。

早川町は南アルプスの南麓に位置し、高く

険しい山々の緑と、そこから流れ出す早川の豊かな水によって、独自の山村文化を育んできた。しかし、戦後の水力発電所の建設や、農林業の衰退によって、大自然は原型をとどめていない。その上、多くの住民が町を出て、一時は1万人近くいた人口も、現在は2000人程度。子供や若者の数が減り、過疎化と高齢化に悩む町となつてしまった。

日本の上流域には、同じような問題を抱えた町や村が700余りある。研究所ではこれらの市町村と交流を深めながら、活動を推進していきたいと、年1回シンポジウムを開催している。

## 方言や遊び、郷土料理を調査・伝承

日本上流文化圏研究所は、早川町の長期総合計画の一環として、平成8年にスタートした。中心メンバーは前述の2人のほか、事務



精力的に活動する日本上流文化圏研究所のメンバーたち



赤沢・青年同志会の生みの親、望月利和さん



上流圏で発行した文庫。各500円、『鳥の目』1500円、10000円

局員2人と学生研究員3人。元小学校の校長先生だったという大倉さん以外は、みんな20代の若者だ。しかも、地元のメンバーだけでなく、各界の知識人や大学生など、全国各地のネットワーク会員90人が活動をサポートしている点も画期的だ。

「最初に手がけたのは地域資源の発掘です。町民の人たちと一緒に地元研究班を結成し、昔の遊びや郷土料理、地元のビュースポットなどを調査しました」

町おこしをするなら、まずその地域を知ることから始めよう、というわけである。

郷土料理の研究班では、昭和30年代まで町内で広く作られていた「すばく」という麦飯を復活、地元の年配の女性が作って試食会を開いたこともある。

ビュースポット探索班は、地元の山々から富士山の眺望を調査したり、秘境の絶景を探したり、早川の新名所を発掘している。

今年の2月からは、新たに古文書講座をスタートさせた。各家庭に眠っている古文書を持ち寄り、読める人が講師になってみんなで勉強する。古文書を読み解くことで、町の歴史や昔の庶民の暮らしが見えてくる。それが同講座の主目的である。

ほかに、広報紙や文庫の発行、ライブラリーの開設、町の将来をみんなで勉強する「町民塾」など、研究所ではさまざまな活動を展開。町から支給される予算は年間1300万円と少ないが、若さと情熱で精力的に取り組んでいる。

### 誇りを持って暮らせる町づくり

3年前から始めた、町民全員を紹介する「2000人のホームページ」づくりも斬新な試みだ。自治体のホームページといえば、観光施設や特産品を紹介するものがほとんど



研究所で月1回行っている「くっちゃべりの会」。自由な議論の中から町づくりのアイデアが出ることも。

だが、ここでは、町民が持っている生活の知恵や技術、町に対する意見などを収集し、町内外にむけて発信している。

「まだ300人ぐらいしかできていませんが、ホームページを見て、興味を持った人が町を訪ねてくれたこともあります。人材のデータベースなので、今後、いろんな活用ができると思いますよ」

ホームページを作るためには、町民ひとりひとりを取材して回らなければならない。大変な作業だが、あと何十年かしたら聞けなくなるかもしれないお年寄りの貴重な話なども残すことができる。

交流促進センターのロビーには、パソコンが使えない高齢者のために、ホームページを印刷したものが貼られていた。同町の人たちの記事を熱心に読んでお年寄りに、「パソコンでも見ることが出来ますよ」と、大倉さんが話しかけると、「この次はパソコンで見てみようかな」と答えたという。

活動の成果は徐々に現れてはいるが、全体



木工の店「淳司」には、依田修さん・淳さん（写真）親子が木工仕事のかたわら作った木工品が売られている。

に浸透するにはまだまだ時間がかかりそうだ。何しろ、早川町の面積は370平方kmで、県下の市町村の中で一番広い。

「今後の課題は、やはり過疎化と高齢化ですね。お年寄りの多い町だけに、新しい取組みを理解してもらうのは難しい。理想と現実の兼ね合いの難しさを実感しています。でも、川の上流に生きていることに価値を見出し、みんなが不平不満を言いながら暮らすのではなく、『この町に誇りを持って暮らしている』と自信を持って言えるような町にしたい」と、夢を語る鞍打さん。10年後、20年後に訪ねた時、この町がどのように変わっているのか、楽しみだ。

### Uターン青年たちが守った美しい町並み

早川町ではもう一つ、訪ねたい場所があった。身延山奥の院と、修験の霊山七面山とを結ぶ身延往還の宿場町・赤沢である。平成5





年に国の重要伝統的建造物群に選定されたこの宿場町は、町並みの美しさもさることながら、それが地元のUターン青年たちの手で守られたという点で珍しい。

赤沢宿は、町役場から早川の支流春木川を3キロほど上ったところにあつた。急な石畳の坂道に、旅籠風の家が建ち並び、まるで時代劇のセットに迷い込んだような景観。江戸後期から大正時代にかけて、登拝者たちが泊まる講中宿の村として賑わつたそう、軒下にはおびただしい数の板マネギ（講中が泊まった際、印として残したもの）が貼られていた。

山に囲まれ、豊かな木材資源に恵まれた地域だけに、昔からこの集落には仙人や木挽き、大工などの職人が多かった。彼らが建てた民

家や旅籠は、建築家も注目するほど水準の高いものだという。

しかし、昭和30年代の高度成長期に入つて、赤沢宿は衰退の一途をたどつた。旅行の志向が変わつて登拝者が減つた上に、バス路線の整備で、赤沢に泊まらずとも七面山に行けるようになったからである。

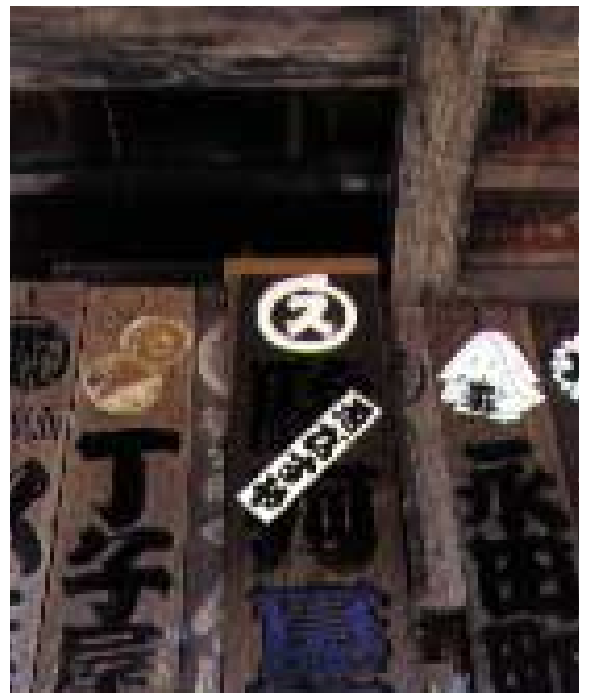
過疎化の波に曝され、さびれる一方だったこの宿場町を、何とかしなければと立ちあがつたのは、地域のUターン青年10人で結成した「青年同志会」だった。15年ほど前、彼らの手によって身延往還の石畳が復元されたのを機に、住民たちも一体となつて民家の修復や祭りの復活に取り組んだ。そして、平成5年、赤沢宿は重要伝統的建造物群保存地区に選定されたのである。

### 経済的な基盤づくりを

赤沢青年同志会結成の仕掛け人、望月利和さんに、当時のお話をうかがうことができた。「僕が町に帰ってきた頃は、祭りや年中行事もなくなつていて、子供の頃のように楽しいと感じられなかつたんです。だから、自分たちの子供が住んでくれる町にしようということで、始めたわけです」

結成にあたって、「寄付は求めない」「出席を強要しない」などいくつかの決め事をした。そして、年会費1人6000円を集め、10人分の6万円で行うことをやるうと決めた。「最初に手がけたのは道の測量です。自分たちがどこに住んでいるのかを知るために。測量することで、集落の危険な場所がわかつたので、次にそこを修復しました」

続いて、昔、行われていたどんど焼きや盆踊りを復活させ、子供向けの映画祭を開いた。そんな同志会の活動に目を止めた辻一幸町長が、環境都市計画に詳しい山梨大学の花岡教



授を紹介。同志会の勉強会に花岡教授が参加することで、会の活動はさらにステップアップした。都会に出ている人を元気づけるために、『ふるさと通信』を発行し、集落内外に桜やアジサイを植樹、身延往還の石畳も復元した。

「もっとも、石畳は100年かけて自分たちの手で作る計画だったんですが、町長が『発想がおもしろい』と認めてくれて、町から補助金250万円が出たんです。その後も毎年、予算を組んでくれましたね。僕らも頑張ったけど、それを評価してくれた町長がすごい。赤沢宿の保存は辻町長の後押しがあつたら、できたのだと思いますよ」

今後の課題は「経済的な基盤づくり」と語る望月さん。町並みは甦つたが、成人した子供たちは依然として都会へ出て行くのだという。まだまだ課題は山積みのようなのだが、彼らならやりとげてくれるだろう。

文・小田礼子／写真・小林 恵





貴重な風土と文化財を21世紀へ

# 棚田に原風景と先人の偉業を見た

保存会のお年寄りの指導で250人のオーナーが田植え  
三重県紀和町「丸山千枚田」

山の中腹に現れた7町歩に及ぶ水田地帯。斜面を耕して石を組み土を盛り、慶長時代にはすでに2200枚の田圃があったという紀和町丸山地区の千枚田。平均10坪という小さい田だが、今日まで休むことなく水を貯え、芝を刈り込んで耕作して美味しいお米を生産してきた。町は千枚田保護の条例を制定して保全に取り組み、5年前からオーナー制度もスタートした。一時は500枚にまで減った田が現在1340枚と全国有数の規模に復活。5月26日、27日にはオーナーや子供たち250人が参加して田植えが行われた。

「すごく楽しい」「懐かしいね」

紀和町は三重県の南端に位置し、熊野川へ注ぐ北山川を境に和歌山県に至る総面積約114㌔の町。奈良時代に東大寺に大量の銅を献上したという歴史の古い紀州鉾山、吉野熊野の山岳信仰を伝える歴史文化財、そして国指定の名勝天然記念物になっている北山川の深流美、瀨峡など、変化に富んだ自然と歴史にあふれている。

役場や鉾山資料館等のある町中心部から国道311号を東北方面に行くと、やがて道は鬱蒼とした森へ入り、「丸山千枚田へ」の看板にそって右手に登っていくと、突然森が開けて広大な千枚田が眼下に見えてきた。

ひとつの大きななだらかな山。はるかに望む裾野から、空に届くかと思われる山頂まですべてが田圃で、水を湛えた田は初夏の日差

慣れた手つきで田植えする地元の中学生たち(上) OLも参加(下)

津市から参加の北折君





しを浴びて眩しく輝いている。山頂付近には  
棚田を守り続けてきた丸山地区の集落があ  
り、いくつもの農道が田圃の中を走っている。  
農家や町のボランティア等がこの日のため  
に苗を育て、田を掘り起こして苗代を作り、  
土手の草刈りをし、田には植えやすいように  
表面に線を引いた。田毎に苗も置いてある。  
いよいよ待ち望んだ田植え作業。土曜日は  
100組、200人から250人のオー  
ナーがやってくる。それに伴いアマチュアカ  
メラマンやマスコミも多数やってきて周辺は  
人、人で賑わっている。

町では職員が総出でガイドや整備に当た  
り、特に車の乗り入れを禁止して巡回バスを  
運行している。テント小屋の本部や休憩所は  
冷たい飲物や町や農家の人達が夜遅くまで  
かけて用意したおにぎり、おかゆ、味噌汁が  
あり、田植えを終了した人にふるまわれる。

田圃ではすでに町の小学生45名、中学生38  
名が地域活動の一貫として田植えに挑戦中。  
農家でも田植えは機械化したため、子供たち  
が田に入って手植えする機会は少ない。その  
ため町ではここで体験学習をするようにして  
おり、子供たちは慣れた手付きで苗を植えて  
いた。ただし全員が長靴履きであるのが気  
になる。「素足で何かあると困りますので…」  
と引率の先生はすまなそうに答えた。

その点、個人で参加した親子たちは泥んこ  
遊びながら、水と土の感覚を楽しんでいる。  
初めて参加した松並さん一家（新宮市）、植  
えた苗は線からはずれて美的ではないが、農  
家のおばあさんのフォロワーで何とか植え終え  
た。

「初めは少し気持ち悪かったけど、慣れると  
すごく楽しかった。ご飯を大切に食べようと  
思いました」と加奈子ちゃん（小2）は言っ  
た。津市から二人の男の子と参加した北折江里

さんも初めての参加。「子供に自然や農業に  
ふれてもの大切さを学ばせたいとオーナー  
になりました。千枚田をみて先祖達の苦労と  
知恵、守っていくことの大切さが判りました。  
お米が届くのが楽しみです」

田植えを終えて土手を登ってくる男性グル  
ープがいた。大阪からやって来た電源開発と  
いう会社で、当初からオーナーになり、毎年  
10人が田植えにも参加している。「子供の頃  
は田舎でよく手伝った、懐かしいね」と年配  
の人が言う。田植えはアツという間に終わり、  
このあと町内にある湯ノ口温泉などに出かけ  
て入浴や観光を楽しむのだという。

田にはオーナーになった人の氏名と在住都  
市・県名が書かれた看板が立っている。沖縄  
県や、東京の人もある。田植えには参加出来  
ない人もいるが、農家が日常の管理を含めて  
お米の収穫までを担う。オーナーは3万円で  
約100平方メートル分の権利が与えられて  
田植えや稲刈りができるほか、棚田で収穫し  
た新米15キロと、丸山地区の農家が用意した  
野菜や、農産物加工品などが年2回届けられ  
る。

「棚田で作ったお米はとても美味しいんです。  
低農薬で手間暇かけて栽培し、出来た米は天  
日干しするからでしょう」と語る新宮市の西  
北畑さんグループは時々出かけてきては農家  
の人達と交流し、同地区のお米も購入してい  
るといふ。

### 条例を制定して町ぐるみで保護

棚田を守る運動は全国的に活発化してきた  
が、紀和町の丸山千枚田の保護活動はすでに  
10年以上になり、全国の模範的存在になっ  
ている。

当日、早々に会場に来てオーナーや関係者  
の激励に当たっている下川勝三町長にお話し

を伺った。

「千枚田は貴重な文化財であり、自然環境面  
でも大きな役割を担っています。前中浦町長  
が丸山千枚田を残していきたいと強い意志を  
示し検討を重ね、平成6年3月に保全してい  
くための条例を制定しました。町の商工会、  
森林組合、千枚田愛好会などのボランティア  
グループが年2、3回草刈りをし、町も年間  
1200万円の特別予算を組んで、維持管理  
に当たっています。現在は丸山地区の農家30  
戸が耕作に熱心に取り組んでいます。高齡  
化が進み60代後半から70歳、80歳代の人達が  
メンバーの中心です。5年前にスタートした  
オーナー制度も定着してきましたが、常に棚  
田の必要性和会員の協力アップを訴えていく  
ことが必要で、課題は尽きませんね。

今年4月で、紀和町は自治体で高齡化率が



青空を映して一段と輝く千枚田。中央には巨大な岩があり、田を見守る石仏の  
ように見える





毎年200名が参加する三重県の勤労団体の人たち。宿泊する家族たちに農家が協力して餅つき大会(湯ノ口温泉)



湯ノ口温泉「瀧流荘」



トロッコ列車

を含めて世界に残したい文化遺産に登録できると嬉しいですね」と上地建設課長は言う。翌日曜日は小雨降る中で三重県の勤労者団体の職員や家族、OB会「めだかの学校」他のグループ約120名が本格的に田植え作業を行った。6年間にわたって交流と農作業の手伝いをしてきた強力な助っ人団体で、世話役の松岡隆さんは「ここはグリーンツーリズムの原点です。子供や若者が農業体験をし、また都市のシルバーも活動できるふるさとしたいと思っています」と言い、初めて参加する若者たちの指導に当たっていた。

### 人気の温泉、ホテルは三セクで

千枚田の脇には交流促進センター「千枚田荘」があり、訪れた人の交流の場になっている。この日は関西から訪れたアマチュアカメラマン達が多数来て、店内に展示した千枚田の写真を熱心に見ている。毎年一般より写真を公募して秀作を展示しているが、プロも顔負けの力作揃いである。

我々の宿泊したホテル「瀧流荘」もカメラグループで満杯。共に町の三セクが経営しており、とくに「瀧流荘」は高級感のあるサ-

ビスのよい温泉旅館で、熊野本宮観光への足場としても人気がある。熊野川から北山川の溪谷美を楽しむジェット船も出ている。

「瀧流荘」の奥には湯ノ口温泉がり、その先は元鉱山。むかし鉱山労働者を山まで運んだトロッコ列車が復興して温泉まで往復。宿泊や交流、食事等の施設があり、温泉は毎日入浴客で賑わっていた。

・オーナー制度の問い合わせは  
紀和町産業建設課 05979(7)1111

文/浅井登美子 写真/小林 恵

## 棚田を守れ！保存へ向けて新たな動き

農水省の調べによると、全国には水田が約270haあるが、うち棚田(千枚田)は全国900市町村の1万4000地区にあり、面積は水田の8%、約21・6haに及ぶという。

棚田は稲作文化を尊んできた日本の歴史であり、山里の自然環境保全上からも貴重なものになつていくが、農家の高齢化と過疎化、機械化作業が困難等により、耕作の放棄や休耕が増えている。そのため保存、再生がクローズアップされるようになってきた。

棚田を保存していくための代表的な活動がオーナー制度。都市住民などが会員になって保全に必要な費用の一部を負担し、田植えや稲刈りに参加して農家と交流。収穫した新米や野菜等をもらうもので、平成4年に高知県梶原村で初めて取り入れられた。

以来オーナー制度が普及し、30市町村(約30ha)が行つてお

り、オーナーの数は1万人を越えたといわれている。

オーナー制度も当初は交流を目的にしたイベント体験型だったが、農家の負担が大きいためから最近では労働力提供型になりつつあり、農家に代わって農作業を代行するグループも一部に出た。しかし田植え後の草取りや毎日の水管理の作業は棚田の農家が行わなければならないため、担い手の不足や高齢化は今後も大きな課題となりそう

だ。そのため農水省は中山間地の農地保全策として「中山間地等直授支払制度」を12年度よりスタートさせた。これは棚田を有する市町村が集落・個別協定等を結んで保全を積極的に推進していこうというもので、5年間継続して生産活動に従事する人(集落)には賃金等を支払っていく。

一方、棚田の歴史的価値や自然風土等に着眼し、21世紀に残す

べき貴重な財産として、国指定文化財の「名勝」に指定される地区も登場してきた。長野県更埴市の「姨捨の棚田」が第一号で、昨年は能登半島の日本海に面した「白米の千枚田」も名勝指定された。

白米千枚田は急斜面地を見事な美田に作り上げた棚田の代表的な存在として、全国でも最も早くから景勝保存基金を発出して維持管理を行い、県も助成して観光価値を高める一方、ボランティア活動も活発だが、かつて20戸あった農家は13、14戸になり、現在は5戸までに減少している。そのため輪島市内の銀行員や市職員、JAの若者等が300枚程を分担して耕作している。内外の環境団体の参加、千枚田十字軍の結成、フォーラム開催等で保全の輪は広がっているが、維持・保全を常に積極的に進めていくことが必要



## モトクロス、カヌー、玉入れ選手権 スポーツ交流のまち 和寒町（北海道）

スポーツを通じて自然に親しみ、人と交流することをめざして独自の地域おこしをしている和寒町には、毎年夏になると多くの若者がやってくる。

北海道を代表する夏のイベントとして人気あるのが「全日本モトクロス選手権北海道大会」。7月第一土日曜日にわつさむサーキット場で開催され、見学者を入れて約1万人が炸裂する音の中で激しい勝ち残り競技、ハイレクニックやパフォーマンスに熱狂する。

同大会は（財）日本モーターサイクルスポーツ協会（MFJ）が主催するもので、全国から実績のあるモトクロス競技グルー

プが参加するほか、国際A級選手も多数やってくる。

会場は山麓の斜面にあり、垂直に近い急勾配や無数アップダウン、カーブの連続する難コース。大会早朝まで雨が降っていたため、選手は全身泥まみれで転倒も続出した。町ではコースづくりや運営に協力するため、MFJの資格を持つ人が多く、役場企画商工課を中心に会場づくりと当日の世話係に大忙し。しかしバイクを大型車両に乗せてフェリー等で行ってくる選手や関係者を思えば、「数日間の徹夜も平気」と明る。

大阪から初参加した少女ライダーがいた。森居沙也美さん

（13歳）。レディー部門に出場する最年少選手。「父がバイクをやっていたので小さい頃から親しみ、小一から私もバイクに乗り始めました。憧れの北海道にやっとなりました。一般道を走れないのが残念です」と言い、付き添ってきた母親は「マナーを守り、安全の装備もきちんとしていますので心配していません」とにっこり。

毎年見学するという農家の老夫婦は「バイクの購入や保守点検などお金もかかる上に命がけの競技。しかしマナーを守り他者を思いやり、安全への取組も厳しく躡られてきているから、皆爽やかで逞しい若者たちだよ。泥だらけになって走っている姿に心から声援したくなるね」と言っていた。

和寒町の夏休みの交流事業に「カヌー教室」がある。カナディアンカヌーを一週間かけて手作りし、それを美しい湖畔に浮かべて艇操を楽しむというもので、参加費は材料費6万9000円だけ。地元産赤エゾマツを使った最高品質のカヌーが出来る。カヌー愛好家の酒向勤さんが提案した企画を町が支援して平成6年から実施。毎年20艇分募集、20〜30名が参加する。酒向さん等カヌー工房運営委員会（大工さんら6人）が製作を指導し、カヌー教室はペテランのインストラクターが当たる。

秋の一大イベントは「全日本玉入れ選手権」。100個の玉を5人の選手がいかに早く高さ

4・2mの所にある44bの籠に入れるかを競うタイムトライアル競技で、今までのベストはなんと14秒。毎年100前後のチームから申込みがあり、総額200万円の賞金を出している。この発案者で「玉入れ協会」の会長、観光協会会長を務めるのが梶田道悟さん。

「玉入れなら誰でも参加しやすい。玉を入れて100万円を当てよう」で話題になり、今では高度な技術とチームワークが必要なことからかえって人気を呼び、若い男性も多数参加しますよ。梶田さんのアイデアに町長や議会が賛同してポンと200万円出してくれた。今では運営費が450万円かかるが、参加費一万円や道、町の企業や団体の寄付等で大半をまかなっている。「応援団も入れて何千人もの人が来てくれます。この経済効果は大きく、地域の活性化



南丘森林公園の湖でカヌーを楽しむ若者たち

にも役立つと思います」と梶田さんは語っていた。他にスキー、スノーボード大会など、和寒町は「スポーツ宣言の町」。昨年は「ふるさとイベント大賞」スポーツ部門で大賞を受賞している。

・和寒町企画商工課

### 農山村の原風景を残す 藁葺き民家の里の保存

（京都府・美山町）

S0165（32）2421

京都府内で最大の面積を持ち、三國岳、頭巾山等々に囲まれた美山町は、由良川沿いに昔ながらの民家が点在、それらを含めて自然景観と藁葺き民家の保存、農業を活性化させる独自の施策に早くから取り組んでいる。美山の自然を求める観光客は年間44万人に達し、都市住民の美山町への定住希望者も多い。三セクの美山ふるさと（株）が土地や住宅の斡旋に当たるほか、平成7年には二番目の三セク美山名水（株）が誕生して名水を使った緑茶や麦茶を製造し京都市内にも出店している。

一方、北集落の藁葺き民家の里は平成12年12月に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。観光地にせず集落景観を現状のままで保全。地区内に住民の生活を維持するための資料館、生産物加工場、民宿等の協同組合を作り共同で運営してきたが、これらを統合して（有）かやぶきの里、かやの里（特産



藁置き替え作業「田圃は四角心は丸く」をキャッチフレーズにした田にはユニークな案山子が



## 全国過疎問題シンポジウム 2001 in おおいた



### [メインテーマ] 自立への新たな視点

- 地域資源を活用し、  
自立した地域を創るヒント -

日程と主な内容

10月30日(火)~31日(水)

・全体会 (別府市・ピーコンプラザ)

基調講演

(株)地域活性化研究所代表

川島正英

・分科会 (別府市・ピーコンプラザ)

第1分科会「地域づくりと情報化」

第2分科会「地域における起業と産業高度化」

第3分科会「共生の時代の地域づくり」

### 編集後記

初めての沖縄は、船旅でもあった。石垣から鳩間島への貨客船では、なんと舵をとる運転士さんが三線を奏でていた。西表への移動は、郵便局の人が小型ボートに乗せてくれた。竹富島の栈橋は台湾からの団体客でごった返していた。海は、八重山諸島の人々の思いをどれだけ多く映してきたのかと改めて感じた取材だった。(S)  
平日曜日は欠かさずミュージアムの水槽と海岸掃除をする双海町の夕日課長、田植えに訪れたオーナー達を迎えるために準備が大変な紀和町丸山千枚田のお年寄り、役場・子育て・地区の行事と、土日曜日に家でのんびりするのとはゼロに近い東和町の役重さん……。今回ほど地方の人達が一人で三役、四役をこなして頑張っていることを痛感したことはない。過疎化、高齢化の中で地域を維持していくことは本当に大変なのだ。地方のこと皆わかってきているのだろうか。「DePOLA」をもっと都市の人に読んでもらわねば……。 (A)

## DePOLA No. 21

[ でばら ] 2001年秋冬号

発行日 / 平成13年9月5日

発行所 / 財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24

オカモトヤビル8階

S03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集協力・印刷 / 株式会社ぎょうせい

編集工房アド・エー

イターン者を含めて43人が働いている。  
建造物群保存地区に指定されたのを受けてトタン屋根から藁葺きにし、保全と防災にも集落一体で取り組んでいくため、茅葺き屋根保存組合が中心になっ  
**ヤマネコの楽園を守れ**  
**生息地の保全と家ネコからの感染防止**  
西表島(沖縄県)  
て作業・指導等を行っている。  
「でばら」96年秋冬号でリポートした西表島のイリオモテヤマネコ。絶滅危惧種にカテゴリーされているが、現在の生息数は5年前とほぼ変わらず100頭あまりと推定されている。  
大規模な農地開発がここ数年中止されていることが、数の減少化防止に役立っているようだが、一方で低地林に生息しているため、観光シーズンの交通事故は頻りに起きている。さらに

ここ数年は伝染症の流行も懸念されており、竹富町では飼ネコ飼養条約を今年4月に締結し、京都の獣医らボランティアの人々によって家ネコや野良ネコの避妊・去勢を行った。  
島の西部にある西表野生生物保護センターでは、現在、通称「長老」と呼ばれるヤマネコ一匹が隣接する敷地でリハビリ中。人馴れしないよう、その様子はモニターカメラの映像を通して見られるのだが、暑さには耐えている様子はやはり猫。西表島はヤマネコをはじめ多くの野生生物が大切な観光資源



## 過疎連盟制作 / ビデオ完成 「森の贈りもの 川の贈りもの」 - 自然を活かした地域づくり - VHSカラー29分



1111市町村とリンク  
過疎連盟のホームページ  
の一つ。それだけに彼らの楽園をぜひ守っていききたい。  
昨年12月にオープンして以来

半年経たぬ過疎連盟のホームページは、全国の一般市民をはじめ民間会社、大学、地方自治体、政府機関等からのアクセスも多  
く、順調に推移している。  
当ホームページの特色は、「過疎市町村のマップ検索」に

世界遺産に登録された青森・秋田の県境に広がるブナの森、白神山地の麓にある青森県西目屋村、鱒ヶ沢町、秋田県八森町、藤里町では、このかけがえのない自然を活かし、町おこし、村おこしに取り組んでいる。  
先人たちが森や川を大切に守り、自然の恵みによって生きた手法を現代に活かす取り組みを紹介。  
第39回日本産業映画・ビデオコンクールで「観光部門賞」を、第48回教育映像祭・ビデオの部社会教育部門(市民生活向)優秀賞を受賞。

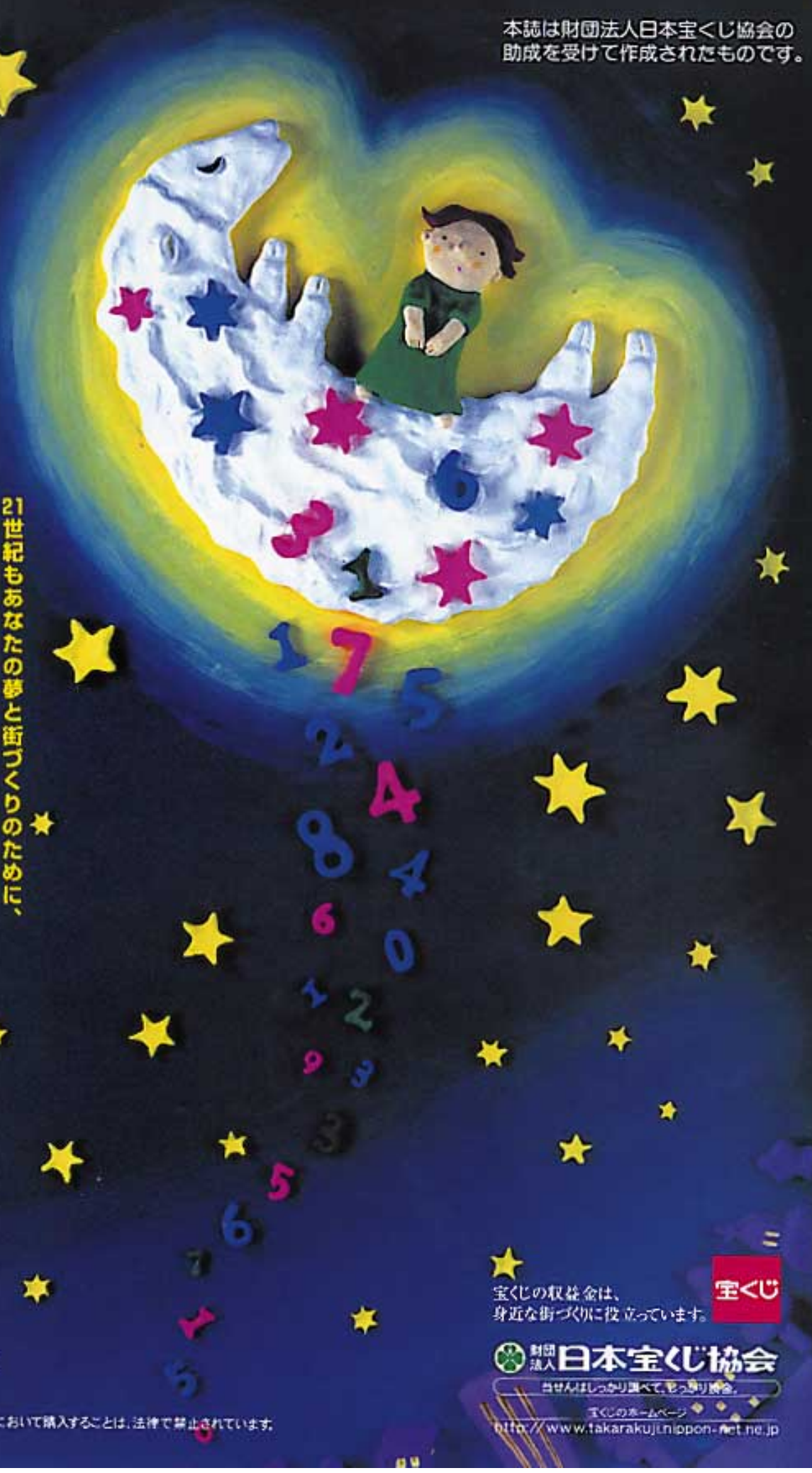
において、ホームページを開設している市町村とリンクして、すぐアクセス出来ることにある。  
現在、リンクしている市町村数は1111(過疎市町村の87.3%)。ホームページを開設していない市町



本誌は財団法人日本宝くじ協会の  
助成を受けて作成されたものです。

# いついつまでも、 つづく夢。

21世紀もあなたの夢と街づくりのために、  
宝くじがんばります。



二科展デザイン部 入選作品  
流郷 美知子

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、  
身近な街づくりに役立っています。

**宝くじ**

財団法人 **日本宝くじ協会**  
皆さんはしっかり調べて、ぜっすり博命。  
 宝くじのホームページ  
<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>